仙台市文化財調査報告書第13集

南小泉遺跡

範囲確認調査報告書

昭和53年3月

仙台市教育委員会

「南小泉遺跡」正誤表

ページ	誤	正
P24　第8図	2.　スクレーバー	2.　スクレーパー
P49　図版1	1－No. 3	1－No. 1
〃　　〃	2－No. 4	2－No. 2
P50　図版2	1－No. 1	1－No. 3
〃　　〃	2－No. 2	2－No. 4
P61～P78 1行目	器面調成	器面調整

仙台市文化財調査報告書第13集

南小泉遺跡

範囲確認調査報告書

昭和53年3月

仙台市教育委員会

序　　文

南小泉遺跡は、現在の市街地の東南にあたりますが、仙台平野のほぼ中央に位置しており、仙台地方に人々が定住して農耕を始めたのがこのあたりだともいわれております。

仙台駅前からバスで約20分、現在では市街地に近い住宅街として生まれ変わろうとしている南小泉遺跡のほぼ中心地と思われる遠見塚古墳一帯が昭和48年公有化されました。現在は史跡公園をつくって市民に親しんでいただこうと環境整備を進めています。しかしながら、これを包括する南小泉遺跡の実態が個々の資料でのみ明らかにされているだけであり、南小泉遺跡の姿が不明確な点もありました。

幸いにも今年度、国庫と県費補助を受け、南小泉遺跡の実態調査をする機会を得、また東北大学、東北学院大学そして地元の皆様のご協力も得ることができ、無事、報告書作成までこぎつけることができました。いろいろ制約もあり、十分な内容になっていないかとも思いますが、一つの資料として本書が活かされれば一応の目的は達成できたと思っております。

本書へのご批評をお聞かせ願うとともに、今後とも仙台市の文化財行政へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和 53 年 3 月

仙台市教育委員会　教育長 佐藤　敬

例　　言

1．本書は国庫補助事業（総額2,000,000円）による南小泉遺跡範囲確認調査の報告書である。

2．本報告の内容は、遺跡の概要、調査の経過、学術的記録と若干の考察を含む。

3．本文の執筆担当は次のとおりである。全体の監修は仙台市文化財保護委員である伊東信雄氏が行なった。

伊東信雄……II－2

結城慎一……I、II－1、III－1、III－3、IV、V、VI－3（3）

工藤哲司……III－2、VI－3（1）、（2）

4．本報告書に掲載した図面のトレースなどは結城、工藤が行なったほか、東北学院大学学生の石本弘、渡部弘美、管野順子、高橋美左子の四氏にご協力をいただいた。

5．本書に掲載した国土地理院発行の地形図は建設省国土地理院長の承認を受け、2万5千分の1はそのまま、5万分の1のものは7万分の1に縮少して複製使用している。(承認番号・昭53東複第11号）

6．遺物、土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人・日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖を使用した。

7．本報告の編集には結城があたった。

8．この調査に関する庶務、渉外などは、仙台市教育委員会社会教育課文化財係（主に朝倉秀之）が担当した。

9．本調査は昭和52年10月に着手し、昭和53年3月31日に事業を終了した。

本　文　目　次

Ⅰ．南小泉遺跡範囲確認調査について―調査の目的と組織―…… 1
Ⅱ．南小泉の概要…… 3
　1．自然と現状…… 3
　2．霞ノ目飛行場内の遺跡…… 11
Ⅲ．調査報告…… 21
　1．分布調査…… 21
　2．発掘調査…… 30
　3．５世紀の須恵器について…… 43
Ⅳ．範囲確認調査を終えて…… 46
Ⅴ．参考・引用文献…… 47
Ⅵ．図版・目録…… 48
　1．遺物実測図版…… 49
　2．遺物写真図版…… 58
　3．(1)図版目録…… 61
　　(2)発掘調査出土遺物目録…… 71
　　(3)表採遺物目録…… 79

写真・図表目次

写真１　遠見塚古墳とその周辺（昭和46年）…… 1
表　1　仙台平野の地質層序と堆積環境…… 3
表　2　仙台の気象（1941～1970年までの平均）…… 4
第１図　南小泉と周辺の主要遺跡…… 7
第２図　仙台市内の弥生土器出土遺跡…… 8
表　3　仙台の弥生遺跡…… 9
表　4　日本の遺跡の年代（^{14}C法による）…… 10
写真２　壺棺出土状況…… 11
写真３　霞ノ目飛行場内遺跡全景（昭和14年）…… 12
第３図　飛行場の遺物出土地区…… 13
写真４　竪穴住居跡床面…… 14
第４図　十三塚式土器拓影…… 15

写真 5　合口壺棺と出土状態(1)……15
写真 6　合口壺棺と出土状態(2)……15
写真 7　弥生式土器出土状態……16
写真 8　出土石器(1)……16
写真 9　出土石器(2)……17
写真10　土師器出土状態……18
第 5 図　弥生式土器（天王山式）拓影……18
写真11　石斧出土状態……19
第 6 図　弥生式土器（大泉式）拓影……19
第 7 図　石製模造品……20
写真12　遠見塚小学校南の畑地……23
第 8 図　南小泉出土の石器……24
第 9 図　南小泉出土の石製模造品……26
写真13　南小泉表土採集遺物……27
第10図　分布調査表採遺物密度図……29
第11図　南小泉遺跡と調査地点……30
写真14　発掘調査前の状況……31
写真15　トレンチ設定場所……31
写真16　トレンチ全景……32
写真17　溝状遺構……32
第12図　遺構配置図……33・34
写真18　弥生土器出土状況……35
写真19　小形溝群……35
第13図　地形図……36
第14図　出土遺物　その 1……38
第15図　出土遺物　その 2……39
写真20　発掘調査出土遺物……40
第16図　南小泉遺跡の須恵器(1)……43
第17図　南小泉遺跡の須恵器(2)……44
写真21　南小泉遺跡の須恵器(3)……45

Ⅰ．南小泉遺跡範囲確認調査について

―調査の目的と組織―

本遺跡は仙台市内における重要遺跡として学界に知られているが、その遺跡全体の範囲が不明確であり、また最近住宅化が進み、範囲確認のための調査が保護対策上必要になっていた。幸いにも今年度国庫補助を得ることができ、範囲確認調査の方法として〈①遺物の分布調査、②遺跡発掘調査、③所蔵遺物の実測〉をあげ、これを基本として南小泉遺跡の水平的、垂直的、時間的広がりを把握する目的で調査を進めた。

調査の組織等は以下のようになっている。

（Ⅰ）　分布調査

ａ．調査地区

遠見塚一丁目・二丁目・三丁目、一本杉町、南小泉二丁目・四丁目、古城三丁目、若林五丁

写真Ⅰ　遠見塚古墳とその周辺（昭和46年）

目、南小泉・沖野の一部

b．調査期間

昭和52年11月７日（月）～11月30日（水）

c．調査組織

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

調査補助：東北学院大学考古学研究部部員

高橋幸宏、金光正裕、宇部則保、斎藤好輝、中嶋康博、佐藤史仁、主浜光朗、浜田秀一、千葉多智恵、白石直子、千葉光生、工藤まり子、佐藤雅子、高橋美左子、玉川裕、石井宏幸、那須祐二、沢畑俊明、庄司博雄、井上敦子、石本敬

（２）　発掘調査

a．調査箇所および面積

仙台市遠見塚一丁目237－１他　200㎡

b．調査期間

昭和52年10月24日～11月10日

c．調査組織

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

調査補助：阿蘇幸二、阿部徳四郎、飯泉寿裕、萱場靖、熊坂吉夫、小山薫、斎藤秀寿、巻野俊夫、松本寿一、真山尚幸、渡辺由起子

調査協力：地主―加藤一

　　仙台市立遠見塚小学校

（３）　遺物実測

担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

実測者：石本弘、渡部弘美、管野順子、高橋美左子

協力：東北大学文学部考古学研究室

　　東北学院大学考古学研究部

　　長町公民館

　　陸上自衛隊東北方向航空隊霞ノ目駐とん地広報部

II. 南小泉の概要

1. 自然と現状

過去の資料から南小泉地区及び南小泉遺跡の概要をつかんでみよう。

仙台市は段丘及び沖積平野からなっていて、南小泉遺跡はその沖積平野上に存在する。南小泉一帯は表1を見てわかるように、仙台平野を形成している4層のうち、霞ノ目層に当たる。

表層：沖積後期の陸上堆積層である深沼層、霞ノ目層、福田町層の砂、泥、泥炭。

浅層：沖積前期の海底堆積層である岩切層の砂。

中間層：洪積後期の蒲生層の砂れき。

深層：第3紀（鮮新世）の竜の口層、亀岡層、三滝層の凝灰岩類と安山岩。

以上の4層構造は仙台平野全般に共通している。霞ノ目層（層厚1～5m）は現世につづく氾濫原で、内陸部の最上部を占めている。この層は土器、石器、古代の植物種子を含む偽層砂岩、ローム層からなっていて、霞ノ目飛行場周辺に典型的に発達している。この層に対比できる地層は七北田川や阿武隈川流域に認められるが、旧河床跡では砂れき層で代表されている所もあるし、海抜2mより低い地帯では、砂質ロームになっている。

表1　仙台平野の地質層序と堆積環境

	地質時代	B・P	地層名	地質	層厚（m）	化石		堆積環境
第4紀	沖積世	5,000～0	深沼層	細～中粒砂	0～5		陸化↑海退	砂丘
			霞ノ目層	砂質ローム れきまじり粗粒砂	1～5	植物遺体 土器		扇状地～はんらん原
			福田町層	ローム～泥炭 砂質(れきまじり) ローム	0.3～10	植物遺体		湖沼低湿地
		10,000～5,000	岩切層	細～中～粗粒砂 シルト質ローム 粘土 砂質ローム	10～30	貝化石多産 貝化石	海底↑海進	浅海～内湾
	洪積世	25,000～10,000	下町段丘れき層	砂・れき	30～50		臨海↑海退	河岩段丘
			若林粘土	粘土				扇状地～ 三角州性扇状地
			蒲生層	砂れき 粘土 砂れき				
第3紀	鮮新世	竜の口層 亀岡層 三滝層		泥岩・凝灰岩 亞炭・砂岩 凝灰岩・安山岩	100＋	貝化石 植物遺体		内湾～浅海

参考文献 (1) 奥津春生 1965、仙台湾臨海地帯の地質構造、仙台湾臨海地帯の地盤、都市地盤調査報告書、第10巻、第3章、P. 15～26、建設省・宮城県。
(2) ――― 1967、表層地質仙台、経済企画庁土地分類基本調査、総説、P. 21～26、図4、5。細説、P. 1～43。図1～12、付5万分の1表層地質図。

奥津春生「大仙台圏の地盤・地下水」昭和48年1月

〈仙台市霞ノ目飛行場（霞ノ目層）から産出した植物遺体〉

○野外植物の部

アカマツの毬果。トチノキの果実種子、果皮、種皮。オニグルミの堅果。ブナノキの殻斗。クロヅルの翅果。ハクウンボクの種子。エゴノキの種子。クマヤナギの核。ツバキの種子。トベラの果実、種子。コブシの種子。チョウセンマツの種子。ミヅキの核。クサギの核。

○栽培植物の部

ウメの核。マクワウリの種子。ヒョウタンの種子。シロエンドウの種子。

※奥津春生「大仙台圏の地盤・地下水」昭和48年１月から引用している。

次に気象要素によって大観すると、仙台は６月～９月の間は海洋性気候の支配をうけて暖湿であり、11月～３月の間は大陸性気候の影響によって低温乾燥になるが、その程度は東京に比し降水日数が多く、湿度もわずかに高く、また日照時間数も少いが、ただ降水量が少ないのが特徴である。特に３月は湿度、雲量、降水日数等、福岡、新潟、東京、札幌に比較して最低で、日照時間数が最多になっている。また東北地方にありながら特に雪が多いわけでなく、一年をとおしてみても、風水害の災害も少ない、めぐまれた環境といえる。

表２　仙台の気象（1941～1970年までの平均）

1.　月平均気温（℃）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛　岡	－ 2.6	－ 2.0	1.4	8.0	13.8	17.7	21.8	23.2	18.1	11.5	5.5	0.1	9.7
山　形	－ 1.2	－ 0.8	2.4	9.2	15.1	19.1	23.2	24.5	19.5	12.7	6.8	1.7	11.0
仙　台	0.6	0.9	3.8	9.6	14.5	18.2	22.1	24.0	20.0	14.0	8.4	3.2	11.6
福　島	0.9	1.2	4.4	10.7	16.2	19.7	23.7	25.1	20.5	14.0	8.4	3.4	12.3
東　京	4.1	4.8	7.9	13.5	18.0	21.3	25.2	26.7	23.0	16.9	11.7	6.6	15.0

2.　月平均湿度（％）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛　岡	74	71	69	67	69	77	82	82	81	79	75	75	75
山　形	82	79	74	67	67	76	80	78	80	80	80	83	77
仙　台	71	68	66	67	73	81	86	84	81	77	72	72	75
福　島	71	69	66	64	67	76	80	80	79	78	74	74	73
東　京	57	57	61	66	71	77	79	77	77	74	68	62	69

3. 月降水量（mm）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛　岡	66	54	82	99	89	120	173	143	179	106	87	82	1279
山　形	98	75	72	68	66	107	174	127	124	106	79	116	1210
仙　台	42	41	64	85	110	160	170	142	184	132	63	53	1245
福　島	52	48	64	75	86	132	154	125	160	125	59	65	1143
東　京	49	65	93	122	145	192	140	153	182	203	96	58	1503

4. 月間の日照時間（h）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
盛　岡	130	146	183	197	220	187	169	187	151	165	137	116	1988
山　形	92	110	158	197	218	177	174	200	145	133	111	79	1793
仙　台	153	157	192	204	210	152	135	164	135	148	146	133	1928
福　島	148	159	193	210	215	158	157	179	133	141	140	129	1961
東　京	186	167	176	178	186	137	164	194	131	135	147	171	1972

理科年表　昭和53年東京天文台編纂

仙台は本州としては冷涼気候に属しており、びわや無花果、ざくろなどは殆んど北限に近い。茶は宮城県の北部まで栽培を見るから勿論仙台でも植栽されるが、柑橘類は全く適しない。ゆずの北限線は阿武隈川下流から柴田郡の槻木附近を通り仙台には育たない。もうそう竹は盛に生育する。

※田辺一郎「仙台市史４」昭和26年７月から引用。

仙台市街の東南部にある古城、即ち昔の若林城を中心とした一円の地域を、藩政時代は若林と汎称した。それより先き仙台城下町創設の頃、この地方は既に小泉村と呼ばれていた。小泉村は、当時南目村、荒巻村及び根岸村などと入会になっていた大村で、北は新寺小路の南裏で南目村に境し、西は東七番丁の西裏で荒巻村に接し、南は広瀬川をへだてて根岸村と相対していた。今の南小泉地区は旧小泉村の一部であるが、この地は小泉村の遺称である。

南小泉の場合、この地方に早くから集落が開け、ここに豊富で良質な清水が湧き出ていたと伝えられている。その湧出した泉の所在地は、今の古城（宮城刑務所）の北方、そして一本杉（旧伊達家邸）の南方にあたる十文字附近、即ち南小泉字新屋敷地区内（現在の南小泉一丁目）で、またここに少林（わかばやし）神社が祀られている。この地域は古来、良質の水脈が通っている所であると言われている。しかしかって湧き出たという泉のあった地点は現在明らかで

ない。

明治維新後、町村行政の整理統合に伴い、従来の宮城郡内の高城郷（松島地方）の小泉村と国分郷の小泉村との混称を避け、前者を北小泉、後者を南小泉と改称した。

いま南小泉と呼ばれている区域は大体昔の若林と汎称された地域で、この区域内には桃源院東、広瀬橋下、遠見塚、鍛冶屋敷、中河原屋敷、行人塚、古城東、的場、尼寺前等約30ほどの大字が区画されていた。なお最近の住居表示による区画によれば大要は次の様になっている。

南小泉一丁目～四丁目、遠見塚一丁目～三丁目、古城一丁目～三丁目、若林一丁目～五丁目、一本杉町、中倉一丁目～三丁目。

南小泉字門田東、伊藤屋敷、遠見塚西、村東、神柵、五ツ谷、御休場南、中河原。

沖野字沢田、中柵、砂押、中堀、河原。

※菊地勝之助「宮城県地名考」昭和45年２月から引用している。

昭和14年に、この地区に霞ノ目飛行場が造られた。これをもと仙台飛行場と呼んでいた。この飛行場は戦中の昭和14～16年に飛行場拡張工事が実施され、その際、多くの遺物や竪穴住居跡などが発見され、学界から注目されるようになった。現在、この飛行場は陸上自衛隊東北方面航空隊で使用している。

当地区も住宅化が進んできて、仙台バイパスが通ると、いよいよ市街化が進み、学校建設の必要も出て、昭和42年仙台市立遠見塚小学校（校地17,493㎡）が遠見塚古墳のすぐ西側に建てられた。またバイパスと遠見塚小学校間の遠見塚古墳を中心とする約17,000㎡の土地が昭和48年に公有化され、現在、史跡環境整備事業が進行されている。

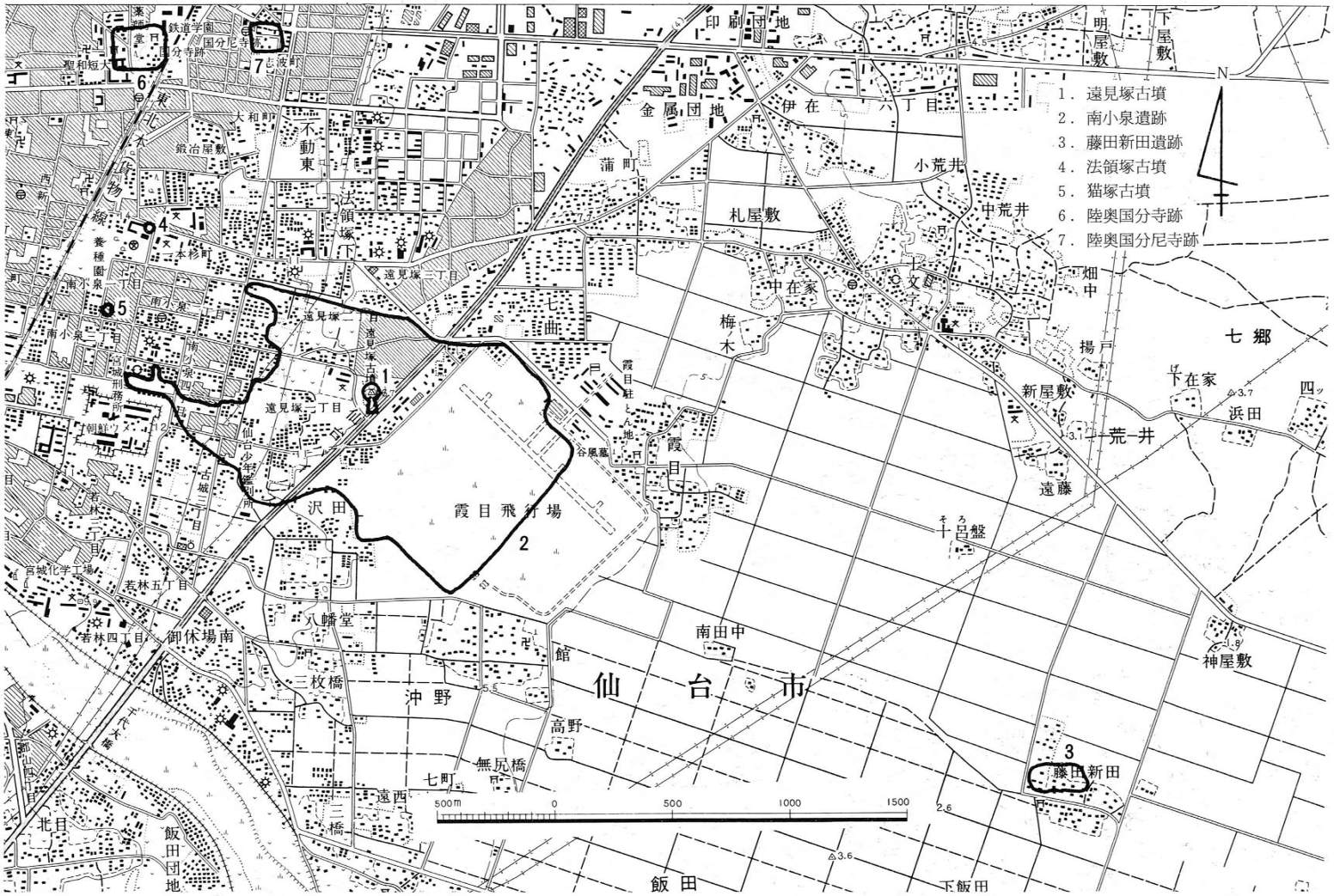
南小泉一帯は仙台平野の真中に位置し、広瀬川の北側に展開している。仙台駅から見て東南の方向になる。

この附近は昔から人が住居したらしく、多くの古代遺跡を残している。ここ南小泉遺跡は弥生時代から古墳時代、そして奈良、平安時代の遺物を出す遺跡であり、当地域の東方約３㎞にある藤田新田遺跡からも弥生時代の遺物が出土する。

また南小泉遺跡の中心附近には全長約110ｍの遠見塚古墳（５世紀に造営された前方後円墳）もあり、これより西方にも、法領塚古墳、猫塚古墳の円墳もあり、かっては大小の古墳群を形成していたものと思われる。

律令時代に入いると条理制が敷かれるが、現在でもこの地には一部条理遺構が残っており、「二の坪」、「三の坪」の地名も残っている。

また、この地域の北側に、国分寺、国分尼寺が造営されたのも、古代における生活の中心が、現在の市中心部よりは東南方向、南小泉周辺であったことを物語っている。



第1図　南小泉と周辺の主要遺跡

第２図　仙台市内の弥生土器出土遺跡

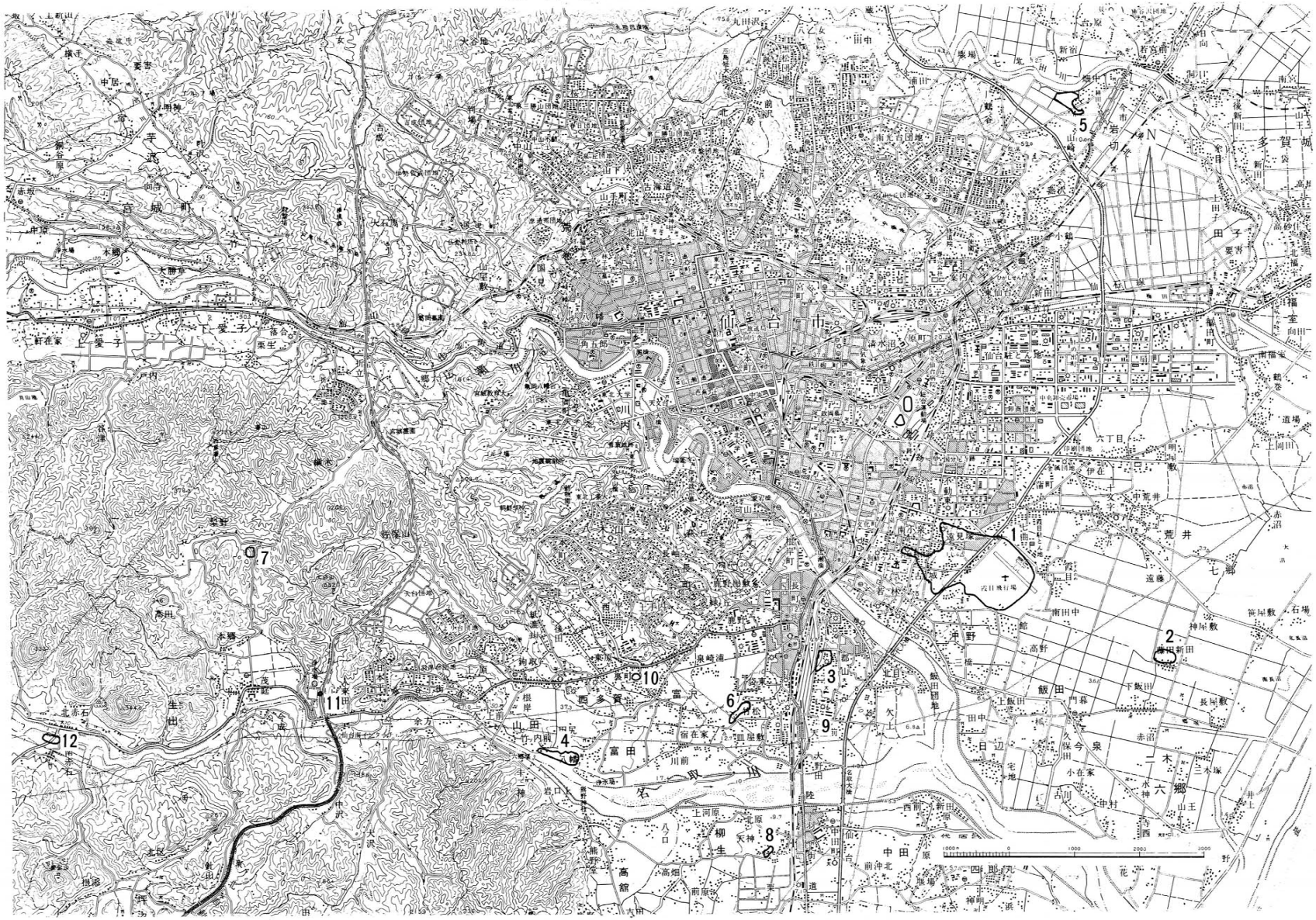


表３　仙台の弥生遺跡

１．南小泉遺跡 （01021）　宮城県 （Ｃ－102）　仙台市	遠見塚１～２丁目、南小泉２丁目、古城３丁目、南小泉字伊藤屋敷、字遠見塚西、字村東、字霞ノ目	弥生式土器、石器、古式土師器、須恵器、石製模造品、紡錘車 植物種子 沖積平野 弥生（中、後）、古墳、平安時代
２．藤田新田遺跡 （01028）　県 （Ｃ－103）　市	荒井藤田字新田	弥生式土器（桝形式）、石器出土 沖積平野 弥生時代
３．西台畑遺跡 （01005）　県 （Ｃ－105）　市	郡山二丁目	弥生式土器（桝形式）、土師器（栗囲式） 自然堤防 弥生（中）、古墳時代
４．船渡前遺跡 （01171）　県 （Ｃ－148）　市	山田字船渡前	縄文土器（大木９）、石匙 弥生土器（大泉式）、土師器 自然堤防 縄文、弥生、奈良、平安時代
５．岩切畑中遺跡 （01299）　県 （Ｃ－221）　市	岩切字畑中	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪 沖積平野 弥生、古墳、平安時代
６．六反田遺跡 （01189）　県 （Ｃ－197）　市	大野田字六反田	縄文、弥生土器、埴輪、土師器 須恵器 自然堤防 縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代
７．梨野Ａ遺跡 （01154）　県 （Ｃ－180）　市	茂庭梨野東字堤囲	縄文土器（大木９、10）、弥生土器 土師器、須恵器 丘陵斜面 縄文、弥生、奈良、平安時代
８．安久遺跡 （01106）　県 （Ｃ－140）　市	中田町字安久	縄文土器、弥生土器、土師器 須恵器、中世陶器、鉄器 自然堤防 縄文、弥生、平安、中世時代

9．諏訪遺跡 （01095） 県	長町諏訪	弥生土器 地点不明 弥生（中）時代
10. 西台遺跡 （01083） 県	鈎取字西台	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、 台地 弥生、古墳、平安時代
11. 人来田A遺跡 （01072） 県 （C－109） 市	茂庭字人来田山	縄文土器、弥生土器 台地 縄文（中）、弥生（中）時代
12. 大苗遺跡 （01051） 県 （C－116） 市	坪沼字大苗	縄文土器、石器、弥生土器 段丘 縄文、弥生時代

宮城県教育委員会　宮城県文化財調査報告書第46集
宮城県遺跡地名表　　昭和51年10月

仙台市教育委員会　「仙台の文化財分布図」収録物件一覧表
昭和51年７月

表４　日本の遺跡の年代（^{14}C法による）

時　　代	土器、石器型式	遺　　跡	材　　料	逆算年数
オホーツク式	擦文	北海道常呂郡栄浦竪穴	木炭	1070±80
擦文土器	オホーツク	北海道常呂郡トビニタイ竪穴	木炭	1310±120
弥生後期	登呂	静岡市登呂	木片	1720±90 ～ 2590±100
弥生前期	遠賀川	名古屋市西志賀貝塚	木炭	2520±140
続縄文	後北	北海道余市郡フゴッペ洞穴下層	炭化クルミ	1950±120
縄文晩期	大洞B	青森県八幡崎泥炭遺跡	クルミ	2820±130
縄文後期	安行２	埼玉県川口市石神貝塚	木炭	3000±120
	堀ノ内１	千葉県市川市堀ノ内貝塚	木炭	3780±150
縄文中期	中期縄文	北海道常呂郡常呂貝塚	貝殻	4150±400
	加曽利Ｅ１	千葉県加曽利貝塚	木炭	4790±80

縄文前期	諸磯A	千葉県加茂泥炭遺跡	木片	5100±400
縄文早期	捺型文	根室市トウサムポロ30号竪穴	木炭	3900±120
	夏島	神奈川県夏島貝塚	木炭	9240±500
	隆起線文	愛媛県上黒岩９層	木炭	12165±600
	隆起線文	長崎県福井洞穴３層	木炭	12700±500
旧石器	細石刃	長崎県福井洞穴７層	木炭	13600±600
	ナイフ型石器	北海道湧別郡白滝ＬＯＣ．３１	木片	15800±400
	ナイフ型石器	長野県杉久保遺跡	木片	17700±500

○木越邦彦、山崎文男、渡辺直経、小林国夫その他による。

○逆算年数は1950年を基準として逆算した年数を示す。

○東京天文台編纂「理科年表」昭和53年参考。

~~陸上自衛隊霞ノ目駐とん地にある写真を~~

~~複写したもの▷~~

2．霞ノ目飛行場内の遺跡

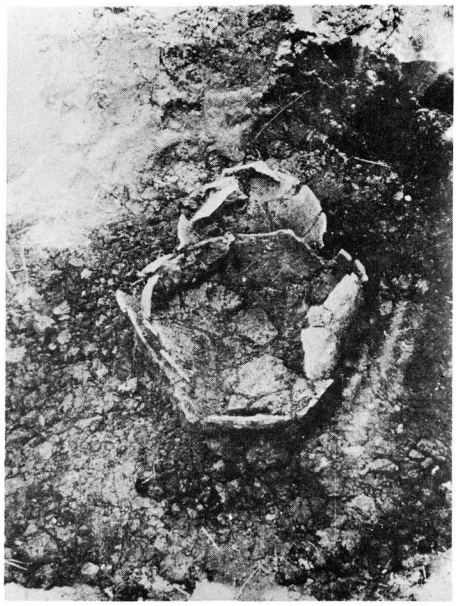


写真２　壺棺出土状況

遠見塚古墳附近は現在ではバイパスが通り、人家もだんだん建て混んで来たが、昭和41年バイパス開通以前はまだ田畑であった。この附近に弥生時代から古墳時代の集落跡が存在することが知られるようになったのは昭和11年頃からであって、附近の農民が「天地がえし」といって、土地を深く掘り下げて上の耕土と下の土壌を入れ換え、地味の更新をはかる作業を行なった際、弥生式土器や土師器の破片が出土することが松本源吉氏によって注意され、はじめて遺跡の存在が知られるようになったのであったが、その存在を確実なものにしたのが昭和14年春から16年春にかけて行なわれた霞ノ目飛行場（当時は仙台飛行場と呼ばれていた）の拡張工事であった。霞ノ目飛行場の建設は時局匡救事業として昭和７年12月から着手され、８年３月に完成したものであ

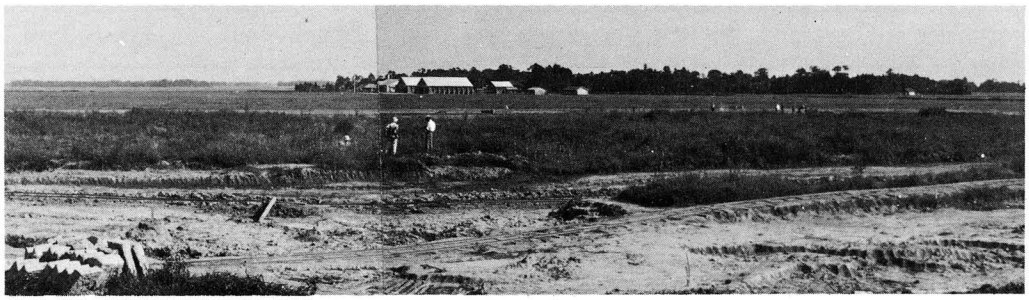


写真３　霞ノ目飛行場内遺跡全景（昭和14年）

ったが、日支事変がおこり、飛行場の整備が必要になって来ると従来の面積では狭少になったので昭和14年から16年にかけてその東北方および西北方に拡張工事とそれに必要な土採りが行なわれた。その際に多くの土器、石器類が発見されて、ここに弥生時代から古墳時代にかけての大きな遺跡が存在することが明らかになった（註１）。(写真３)

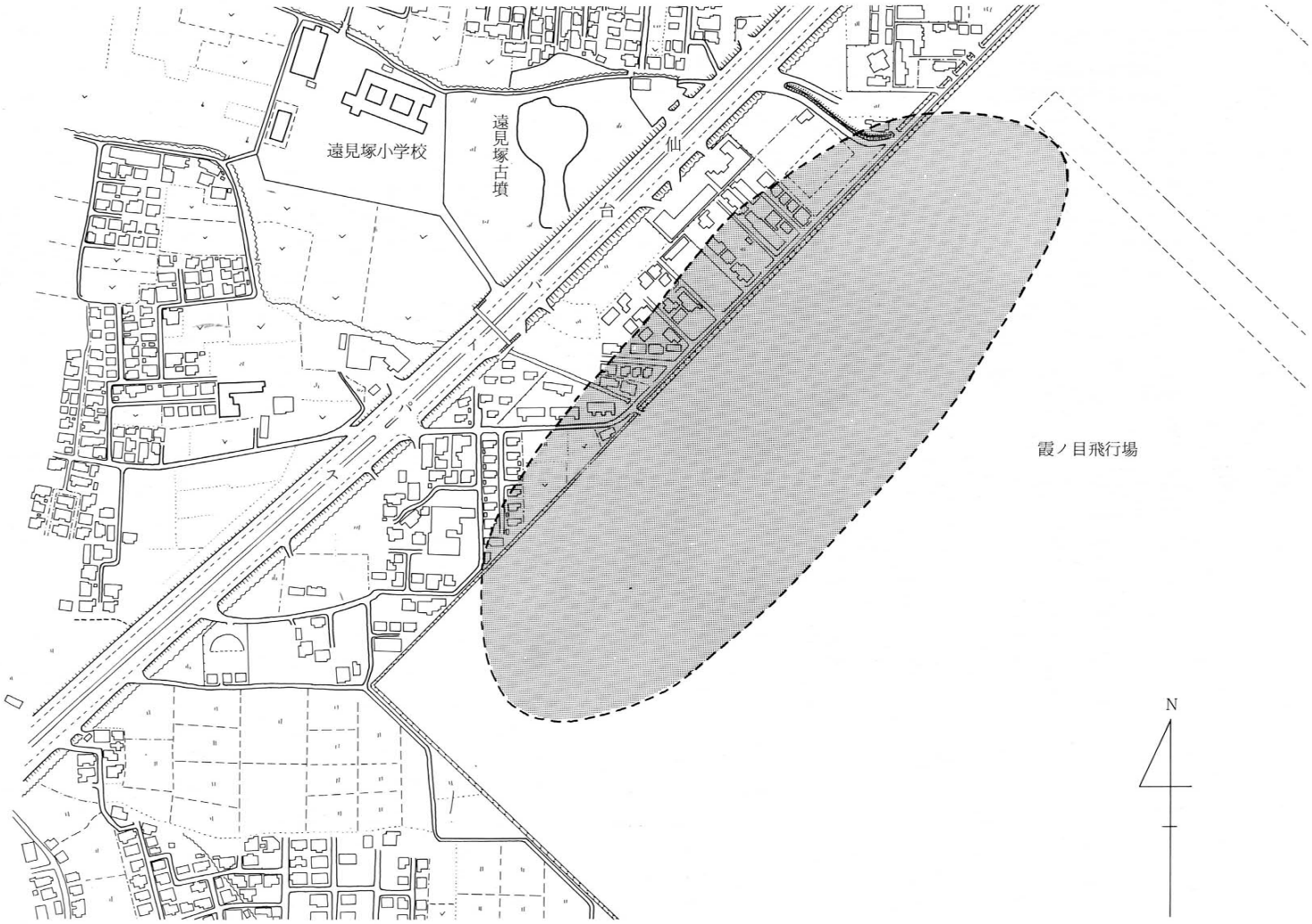
遺物の出土したのは拡張部の中でも西北部の拡張部であるが、その拡張部の全面から出土したものでなく、その一部に限られていた。現在の霞ノ目飛行場の内部西北辺の外堀にそった、幅200mの地帯が昭和14～15年の西北部拡張区域であり、その外側、幅75m、長さ600mの地が土採場であったが、遺物の主として出土したのは飛行場の西角から150mの地点からはじまり、600mの地点に至る飛行場内の地域であった（第３図）。しかもこの地域全体から遺物が一様に出土したのではなく、古墳時代の竪穴住居跡は比較的広く散布していたが、弥生式土器はところどころに分布の中心があって、そこでは遺物の包含が密であり、他の場所では疎であり、場所によっては全然遺物を含まないところも見られた。

地表下30～40cmが黒褐色の耕土層で、その下に黒土層があり、その下が粘土層になっている。黒土層の厚さは所によって異なり、厚いところでは66cmに及んでいたが、粘土層の上が全部耕土層になっていて黒土層を欠くところもあった。

遺物は耕土層および黒土層中に含まれており、粘土層中には見られなかった。おそらく黒土層が元来の包含層で、耕土層のものは耕作の際に移動したものであろう。

弥生式土器は薄くは一帯に分布しているが、所々から密集して出土した（写真７）。このような場所は断面を見ると粘土面に窪味があって黒土が落込んでいる。しかしその底は竪穴住居跡のように平担ではなく、また面積も小さかった。

これに反して古墳時代の竪穴住居跡は弥生式土器の分布範囲よりも広い区域に見られた。当時は発掘調査を行なうことが出来ず、土採りの土層の断面に黒土の落込みがあらわれているのを見てその存在を知ったのであるが、その数は100を越えたであろう。断面にあらわれた竪穴の大きさは、断面の切った場所によって大小が違うが、８ｍが最大であった。小さなものは５ｍぐらいであった。粘土層に掘込まれた竪穴の深さも区々であるが、25cmから35cmが普通である



第3図　飛行場の遺物出土地区

が、まれには70cmに達するものもあった。

発掘が行なえなかったため、竪穴の平面形については調査することが出来なかったが、唯一つ発掘した例について言えば、過半分を失っていたが、一辺6.15m の方形の竪穴であった（写真４）。側壁の高さ27cm、床面は平坦で、中に2.5mの間隔を置いて径35cmの柱穴が２個残っていた。元来は４個あり、４本の柱を建てて梁をわたし、屋根を支えたものと考えられた。竪穴の底面に焼土のあるもの、炭または灰がかたまっていて炉跡と思われるものは各所に発見されたが、カマド跡と思われるものは発見出来なかった。

写真４　竪穴住居跡床面

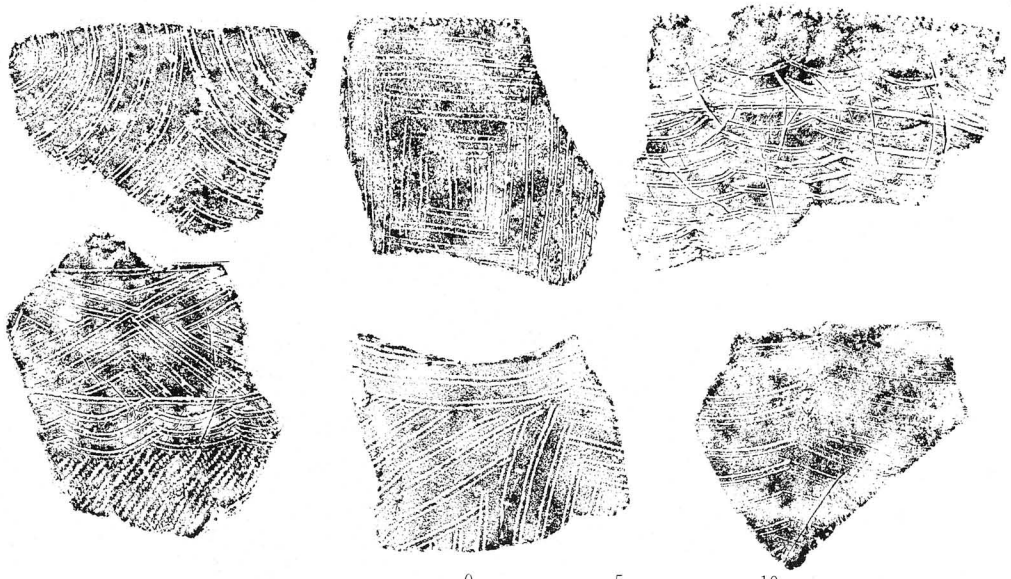
霞ノ目飛行場内から当時出土した遺物は、現在、東北大学、東北学院大学、東京国立博物館、斎藤報恩会博物館などに分蔵されているが、弥生時代遺物と古墳時代遺物の２種類に大別することができる。

弥生時代遺物

弥生時代遺物としてもっとも多かったのは土器である。土器の大多数を占るものは桝形囲式（図版１～４）であり、完形を見られるのはこの型式に限るが、そのほかに若干の大泉式（第６図）、十三塚式（崎山囲式、第４図）、天王山式の破片が出土している。

出土弥生式土器の中に特に注目すべきは合口壺棺の出土で、高さ40～60cmの桝形囲式の大型の壺の上に小型の甕、鉢をさかさまにしてかぶせて蓋としたもので（写真５，６）、壺の底部に焼成後に穿った孔のあるものもある。合口壺の出るのは地表下30～50cmのところにある粘土面に接する黒土層からであるが、粘土面には掘り込みの痕が見られない。

この特殊な組合せをもつ土器は耕作によって上部を削られたものが多かったが、少くとも15組ははっきり合口ということが判る状態で発見された。そのもっとも多く発見されたのは飛行場の西隅から東北の方向に250m 進んだ地点で、この附近から約13組の合口壺が出土した。その出土状態はピット（小竪穴）の中に密集して出るのではなく、0.5m から２m ぐらいの間隔をおいて掘込みのないところから出土した。１個だけ直立していたものがあるが、多くのものは横あるいは斜めに埋められていた（写真５，６）。壺の内部には土以外の何物をも見出すことが出



第４図　弥生式土器（十三塚式）拓影

0　5　10 cm

写真５　合口壺棺と出土状況(1)

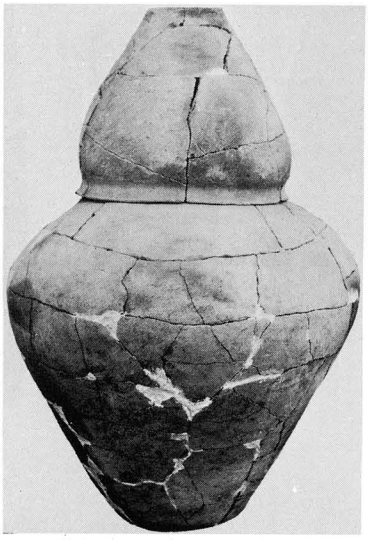


写真６　合口壺棺と出土状況(2)

来なかったが、これは他地方の例から見て洗骨を容れた合口壺棺であったと思われる。附近からは他の土器片が出土せず、合口壺棺だけが出土することろを見ると、意識的に一定の地域に埋められたもので、墓地を形成していたものと思われる。

写真７　弥生式土器出土状態

石器には石斧、石ノミ、石包丁、石鏃、有角石斧、凹石、石杵などがある。石斧には太形棒状石斧、片刃石斧、有角石斧など弥生系の石斧が出ており、石鏃の中にはアメリカ式石鏃がある（写真８，９）。稲穂をつみとるのに用いたと言われている石包丁がわれわれの嘱目しただけでも17個を数えた。籾痕のある土器の存在とともに稲作のすでに行なわれていたことを証明するものである。

写真８　出土石器(1)

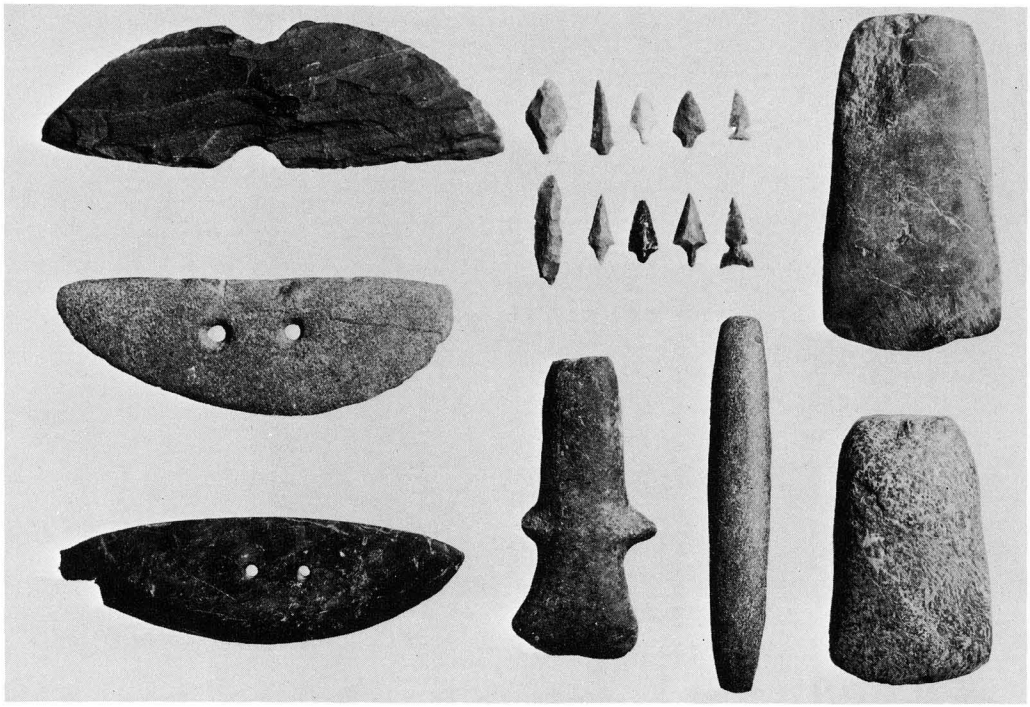


写真９　出土石器(2)

古墳時代遺物

古墳時代の遺物としては土師器、須恵器、石製模造品などがある。土師器は多く竪穴住居跡から出土し、５世紀のものと思われる南小泉式の土師器が圧倒的に多いが、それよりも古い塩釜式より新しい栗囲式も出ている（図版５～９）。成形にロクロを使用した表杉の入式の土師器は２～３点発見されたにすぎない。須恵器の出土は稀であるが５世紀の坏や椀が１～２個出土している。

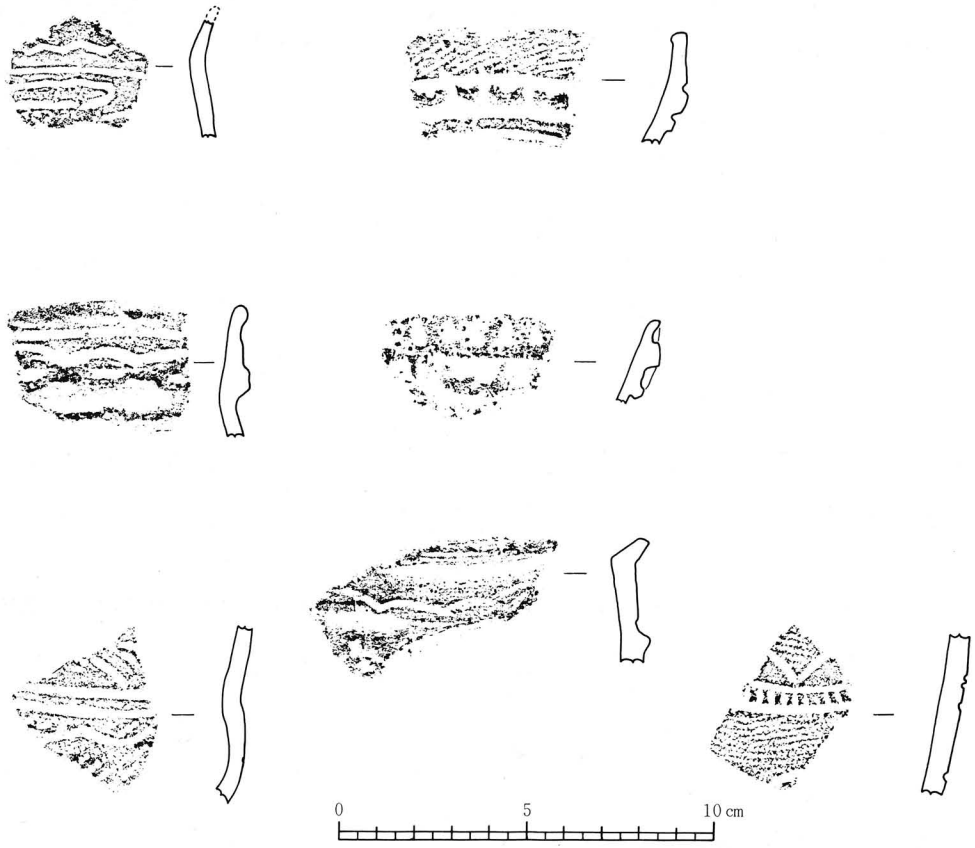
滑石あるいは片岩でつくられた鏡形、剣形、手斧形の石製模造品が出土しているが、その中で注意すべきは長さ26.8cm、幅5.3cmある剣形の模造品であって、中央部に鎬を有し、基部には他の剣形模造品と同じく小孔が穿たれている。剣形模造品としては日本最大のものであろう。（第７図）。

またこれらの遺物とともにイネ、ウメ、シロエンドウ、ヒョウタン、マクワウリなどの栽培植物の種子が採集されていて（註２）、５世紀にはかなり大きな農業集落を形成していたことを示している。

註１　伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』３

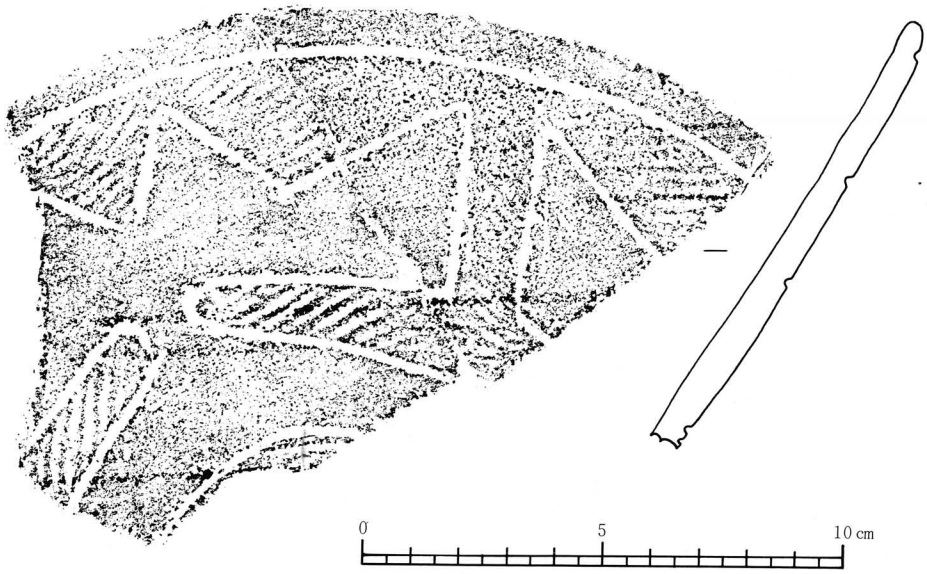
２　奥津春生「仙台飛行場遺跡より発掘された植物遺体について」『古代文化』14の１

写真10　土師器出土状態

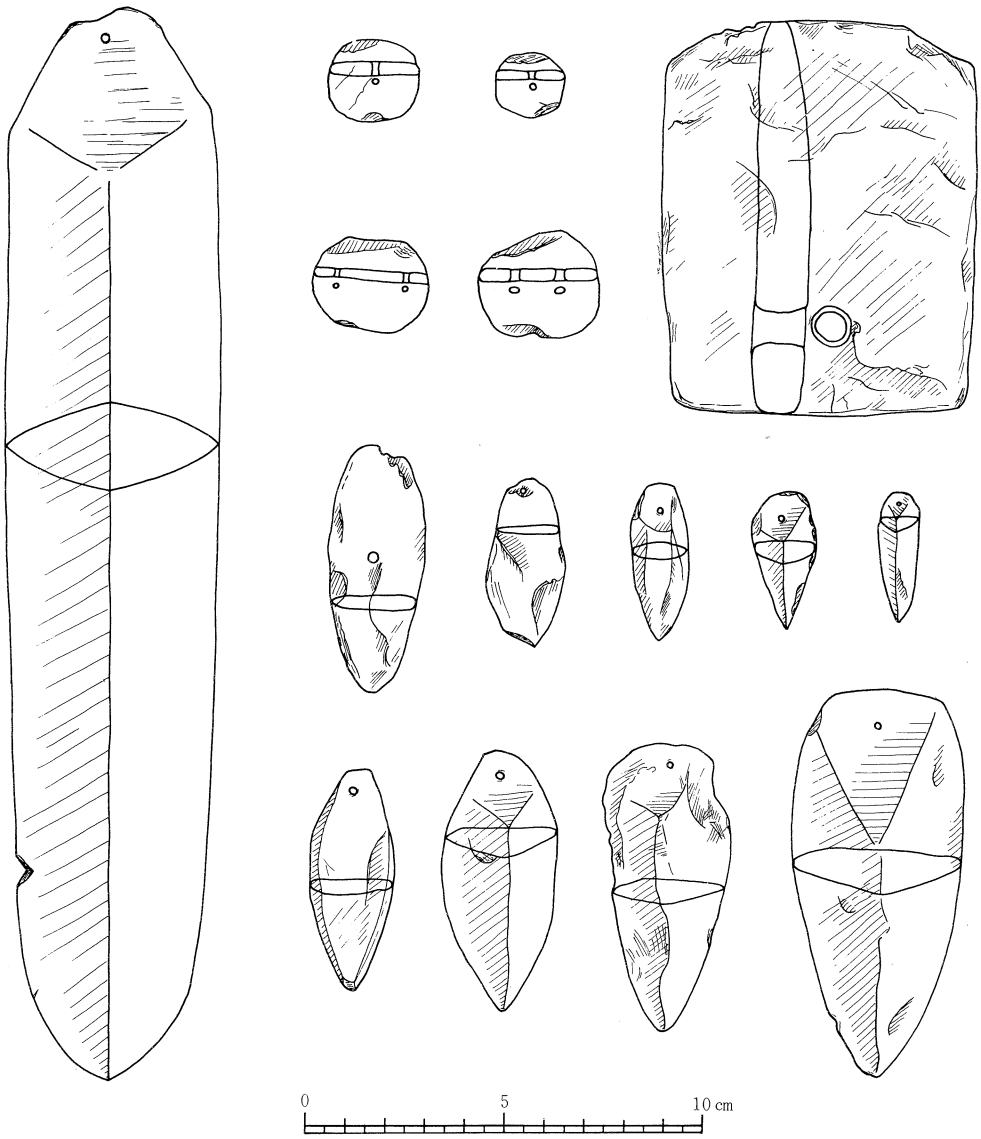


第5図　弥生式土器（天王山式）拓影

写真11　石斧出土状態



第6図　弥生式土器（大泉式）拓影



第７図　石製模造品

III. 調　査　報　告

1．分布調査

分布調査により次の25ヶ所の遺物散布地が発見された。すでに南小泉遺跡の範囲に入れられていた地点と重なるところも若干あるが、遺物散布範囲、そして遺跡範囲の特徴、遺物の散布状況がある程度はっきりしたと言えよう。

（1）　埋蔵文化財調査カードから

1）Ａ－仙台市一本杉町３、４番

Ｂ－高橋源蔵

Ｃ－聖ウルスラ学院から古城に向う道路からみて、南小泉中学校の裏手に位置し、現在は畑になっている。南側は小さな堀が流れている。

Ｄ－東西100m ×南北50m

Ｅ－土師器片２、須恵器片２

Ｆ－0.0008

2）Ａ－仙台市遠見塚一丁目４番

Ｂ－伊藤英次

Ｃ－東側が道路、残り西、南、北が民家に囲まれた畑である。

Ｄ－50m ×40m

Ｅ－須恵器片１、土師器片11

Ｆ－0.0010

3）Ａ－仙台市遠見塚一丁目７－26

Ｂ－高橋栄

Ｃ－佐藤燃料店向いの畑である。

Ｄ－60m ×50m

Ｅ－土師器片３

Ｆ－0.0010

4）Ａ－仙台市遠見塚一丁目13番

Ｂ－早坂実

C－四方を道路で囲まれた畑地である。

D－100m ×80m

E－須恵器片５、土師器片23、石製模造品（有孔円盤）１

F－0.0036

5）A－仙台市遠見塚一丁目19番

B－不明

C－住宅街の一区画に位置する畑。天地がえしも行なわれている。

D－60m ×40m

E－須恵器片１、土師器片３

F－0.0017

6）A－仙台市遠見塚一丁目22番

B－早坂六夫、尾沢長五郎

C－すぐわきに堀が走り、畑となっている。小学校南西の畑である。

D－40m ×30m

E－土師器片６

F－0.0050

7）A－仙台市遠見塚一丁目10、12、13、21番

B－加藤一ほか

C－遠見塚小学校の西側に広がる畑地である。

D－100m ×100m

E－須恵器片５、土師器片37、寛永通宝銭１、石匙１

F－0.0044

8）A－仙台市遠見塚一丁目22番

B－菅原輝男、吉田嘉一

C－現状は遠見塚小学校南側の畑。

D－150m ×100m

E－土師器片64、須恵器片７（樽形甕片１点含む）

F－0.0047

9）A－仙台市遠見塚二丁目20番

B－吉田勘悦

C－現状は畑。遠見塚小学校北側にそった道路を西に100m の所に位置する。

D－50m ×50m

E－土師器片か焼土と思われる赤褐色の粒が見られた。

F－算出不能。

10) A－仙台市遠見塚二丁目21、34番

B－早坂清

C－遠見塚小学校北側の畑である。

D－40m ×20m

E－土師器片18、須恵器片 2

F－0.0250

写真12　遠見塚小学校南の畑地

11) A－仙台市南小泉四丁目11番

B－不明。

C－住宅地に触れた畑作地。

D－15m ×25m

E－土師器片 1

F－0.0027

12) A－仙台市南小泉二丁目11－14

B－小沢実

C－県道の南側にある小さな堀を越し、南に行った道路の西側の平坦地である。現状は畑地となっている。

D－東西50m ×南北30m

E－土師器片 6

F－0.0040

13) A－仙台市南小泉四丁目14番

B－加藤万太

C－現状は畑。宮城刑務所北側に位置する。

D－東西20m ×南北40m

E－土師器片13

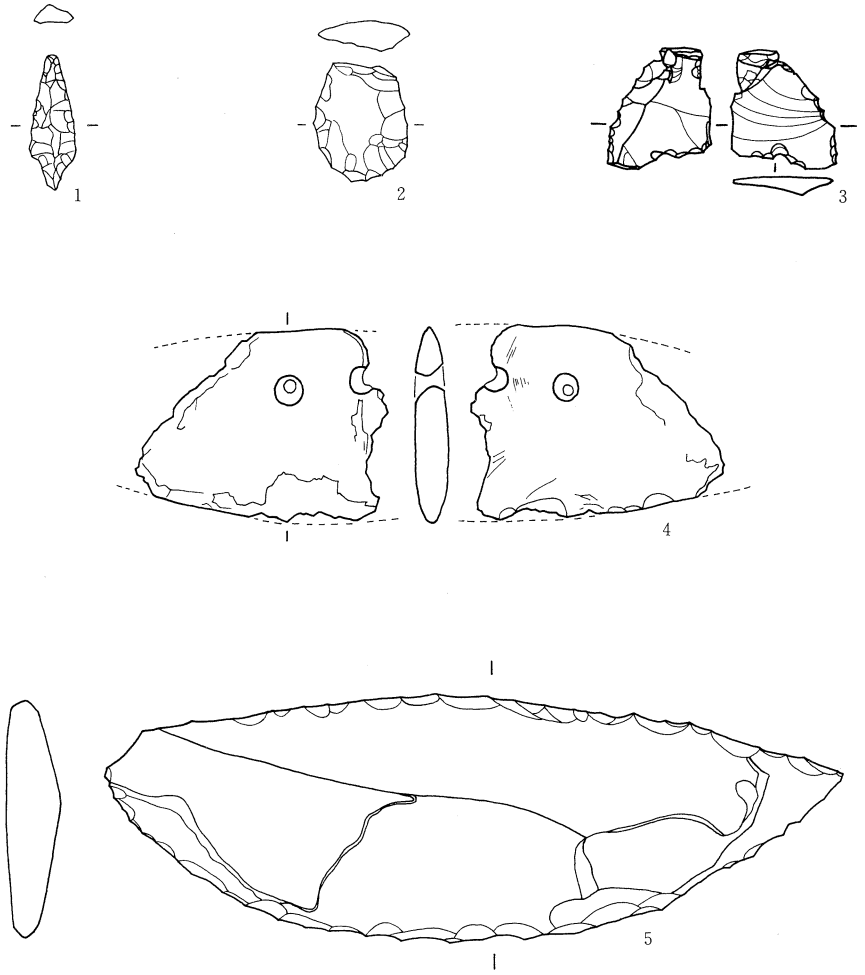
F－0.0163

14) A－仙台市南小泉四丁目15、16番

B－不明。

C－南に刑務所、東西へ広がる平坦地である。10年ほど前に天地がえしされている。

D－150m ×60m



1．石鏃　2．スクレーパー　3．石匙

4．5．石包丁

0　5　10 cm

第8図　南小泉出土の石器

E－須恵器片１、土師器片６

F－0.0008

15) A－仙台市南小泉四丁目17、18番

B－伊藤英次

C－宮城刑務所東側100mに位置し、周囲は住宅と畑がならぶ所である。

D－50m×40m

E－土師器片15、須恵器片11

F－0.0130

16) A－仙台市古城三丁目21、22、23番

B－宮城刑務所

C－自然堤防上の畑地で宮城刑務所作業所となっている。広範囲に土器片が散布している。

D－200m×250m

E－土師器片31、須恵器片８

F－0.0008

17) A－仙台市古城三丁目７、９番

B－伊藤鶴三

C－畑地である。

D－50m×30m

E－土師器片13、須恵器片２

F－0.0100

18) A－仙台市古城三丁目６、８番

B－不明。

C－畑地。耕作のためか、ほとんど遺物は表採できず。

D－50m×30m

E－土師器片５

F－0.0033

19) A－仙台市古城三丁目７番

B－高橋栄ほか

C－畑の耕作のためか土器の散布は少ない。

D－70m×30m

E－土師器片17、須恵器片２

F－0.0090

20) A－仙台市古城三丁目10番

B－早坂昭一

C－畑も耕作のためか遺物は少ない。

D－20m ×10m

E－土師器片 7 、須恵器片 3

F－0.0500

21) A－仙台市古城三丁目13番

B－加藤

C－畑作地。耕作のためか表採困難。

D－20m ×30m

E－土師器片 6

F－0.0100

22) A－仙台市古城三丁目14番

B－早坂市治郎

C－畑地である。

D－20m ×70m

E－土師器片 5 、須恵器片 2

F－0.0050

23) A－仙台市古城三丁目13番

B－伊藤鶴三

C－畑であるが遺物の表採は少ない。

D－40m ×20m

E－須恵器片 2

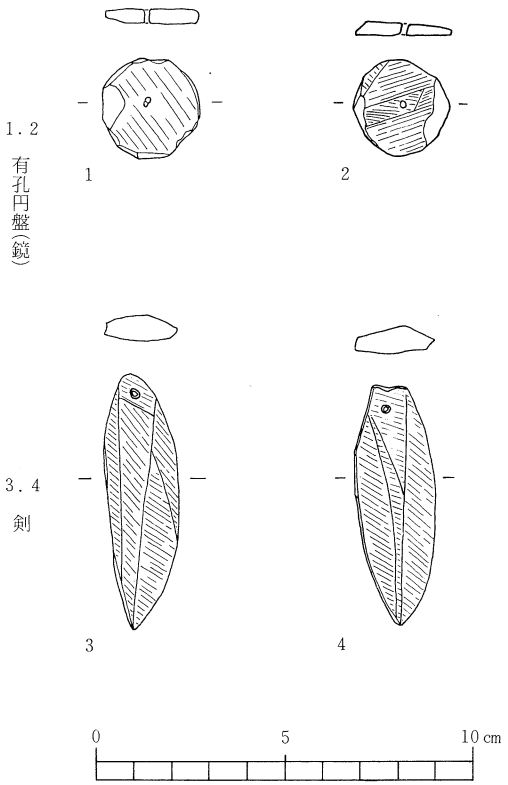
F－0.0025

24) A－仙台市南小泉字二ノ坪13

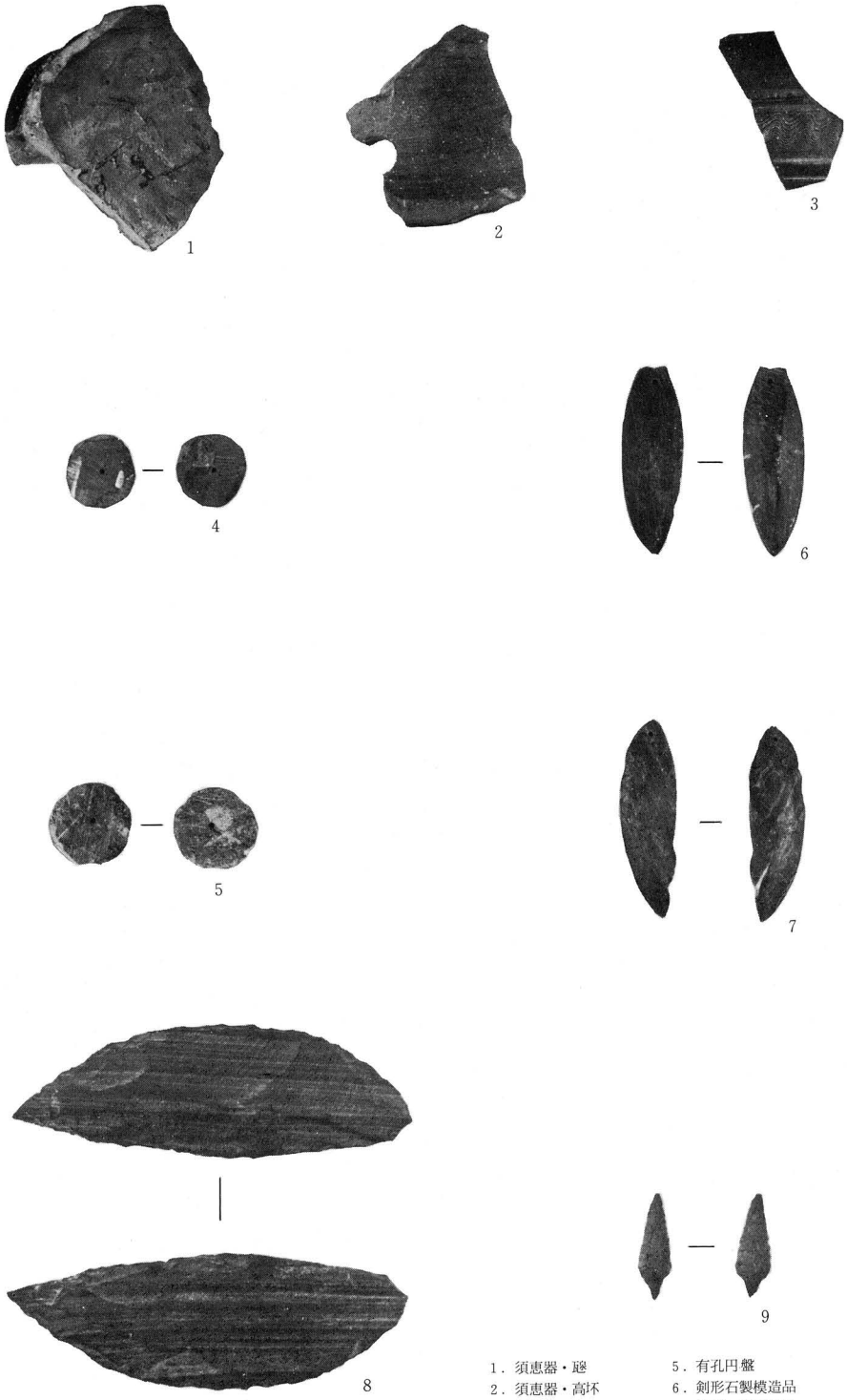
B－早坂

C－霞ノ目飛行場南西境に位置し、平坦な沖積地を形成しており、畑地である。周囲は水田が多い。

D－東西60m ×南北30m



第 9 図　南小泉出土の石製模造品



1．須恵器・甕
2．須恵器・高坏
3．須恵器・壺
4．有孔円盤
5．有孔円盤
6．剣形石製模造品
7．剣形石製模造品
8．石包丁
9．石　鏃

写真13　南小泉表土採集遺物

Ｅ－土師器片２、須恵器片１

Ｆ－0.0017

25) Ａ－仙台市沖野字神柵37

Ｂ－今野甚太郎

Ｃ－平坦な沖積地に立地し、周辺に住宅、水田が多い畑である。

Ｄ－20m ×40m

Ｅ－土師器片１

Ｆ－0.0013

(註) １．Ａは所在地、Ｂは土地所有者（敬称略)、Ｃは立地と現状、Ｄは範囲、Ｅは出土品と出土数、Ｆは出土率である。

(註) ２．出土率とは遺物の散布密度であり、遺物片数を表採範囲面積（㎡）で割った数値である。

(註) ３．13)、14)、15) の表採地点は出土率を合わせて計算して図上に落している。出土率は0.0037となる。

（２） 分布調査から見た南小泉遺跡

今回の分布調査と結果と過去の資料を合わせて遺跡の広がりというものを考えてみると、東は霞ノ目飛行場、西は一本杉町、南小泉二丁目、北は一本杉町と遠見塚二丁目を結ぶ線、南は古城三丁目ということになる。これは東西約1.8km、南北約１kmで、当初、広瀬川近くまで南方に広く分布範囲が広がるのではないかという予想に反して西に広がり、東西に長い分布範囲を示した。ただし遠見塚二丁目より北の中倉地区は相当住宅化されていること、また霞ノ目飛行場より東部は水田であることで遺物の散布を調査するのに不向きであることも考慮しておかなければならない。このことから、今回の結果より、北方、東方へ若干の拡大の可能性が残っているといえる。

遺物の表土採集数と採集地面積からみると、遠見塚古墳、遠見塚小学校周辺、特に西側と南側の畑地に多くなっているが、それ以上に遠見塚一丁目と古城三丁目の境界でバイパス寄りに位置するところが高い密度を示していることが注目される。そこを中心として西、南、北方に少なくなっているようである。東方は仙台バイパスそして霞ノ目飛行場であるが、当飛行場の昭和14～16年拡張の際、多量の弥生式土器、古式土師器が出土したが、遺物の密度から見れば遺跡の中核をなすところは遠見塚小学校、南小泉保育所周辺から霞ノ目飛行場西半にかけてで

第10図　分布調査表採遺物密度図

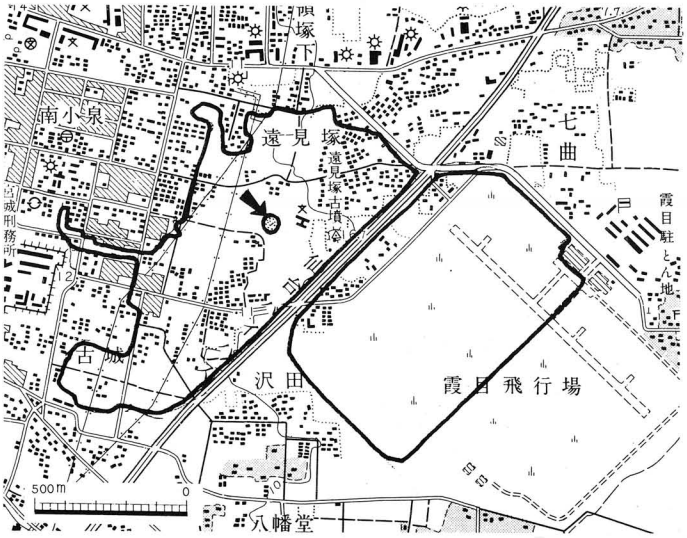
はないかと考えられる。

次に遺物の種類を見ると、ほぼ90％までが土師器であり、残りは須恵器、若干の石製品である。今回、石製模造品（有孔円盤）と樽形甕片は遠見塚古墳周辺で発見されたものであり、過去に表採された直口壺片、器台脚片、石包丁、その他フレークなどもやはり遠見塚古墳周辺であった。これらの資料を検討すると、南小泉遺跡は弥生時代から平安時代までの遺物を出土するところであるが、弥生時代と古墳時代は現在の遠見塚小学校周辺から霞ノ目飛行場にかけての一帯がその居住範囲であり、平安時代にはその範囲がより西へ、より南へ広がったものといえる。

2．発　掘　調　査

（1）　調査地区の概要

南小泉遺跡は、仙台バイパスによって東西に二分され、東部は陸上自衛隊霞ノ目飛行場が殆どを占める。西部は畑地と住宅地となっており、西部が東部よりわずかに高い。今回調査を行なったのは、西部のほぼ中央にあたる遠見塚小学校西側の休耕地である。遠見塚古墳からは250m西方である。調査地区周辺の耕地は、近年の宅地化の進展によって分割され、住宅に囲まれて点在する状況となっている。調査地区畑地の標高は、高い所で11.58m、低い所で10.30m程で、ゆるやかな起伏が観察できる。南側には底幅1.5m程の用水路が東流し、トレンチを設定した所の南側で流れを南方に変える。この用水路に沿って地形はわずかに低くなっている。(写真14、15)



第11図　南小泉遺跡と調査地点

（2）　トレンチの設定と基本層序

調査は、耕地の地割に沿って東西20m、南北10mのトレンチを設定して行なった。しかし、トレンチ内のほとんどは、数次にわたる天地返しにより地表下50～80cmの深さまで攪乱されていた。このため、天地返しが比較的浅くまばらな西端部分に数条の小形溝と、掘込みの深い遺構が中央部にかろうじて残っていたにすぎない。また南側壁寄りに、わずかに黒褐色の攪乱を受けない土層が薄く検出された。この層は、トレンチ南方に延びることが予想されたので、東西５ｍ、南北４ｍの拡張トレンチを設けた。

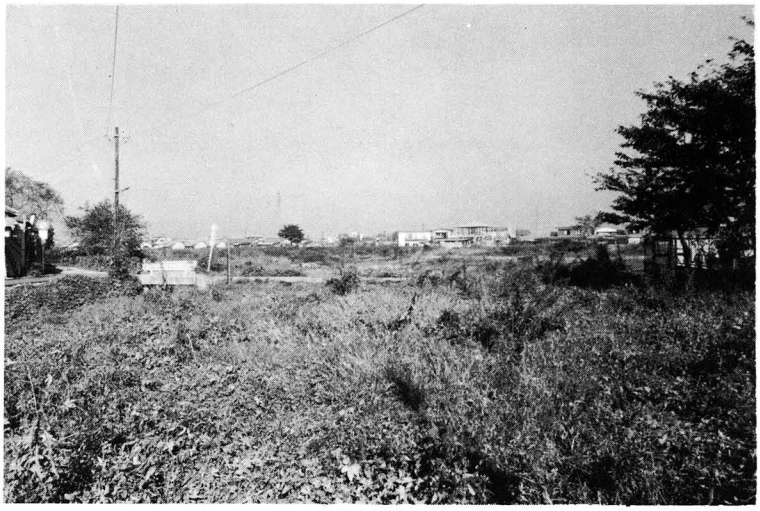


写真14　発掘調査前の状況

写真15　トレンチ設定場所

拡張部において、当該地区の本来の基本層序を確認することができた。基本層序は次の通りである。

第Ⅰ層―暗褐色シルト……浅い所では20cm前後で、各種の遺物が含まれる。(耕作土)

第Ⅱ層―黒褐色粘土質シルト……この地区では10cm前後で、弥生式土器、土師器を多量に包含する。

第Ⅲ層―暗褐色粘土質シルト……黒褐色土と褐色土を混合する。第Ⅱ層と第Ⅳ層との漸移層と考えられる。上面に土師器片が散布する。

第Ⅳ層―褐色粘土質シルト……遺物は含まれない。上部から下部に移るにつれて粘土分が少なくなる。

写真16　トレンチ全景

（3）　発　見　遺　構

発見された遺構は、溝状の遺構１ケ所、小形溝10条である。

イ）　溝状遺構

〔掘込面〕

耕作により上部が攪乱され、プランのほとんどは第Ⅳ層中で検出されたが、南側の保存良好の部分では第Ⅱ層上面で確認された。

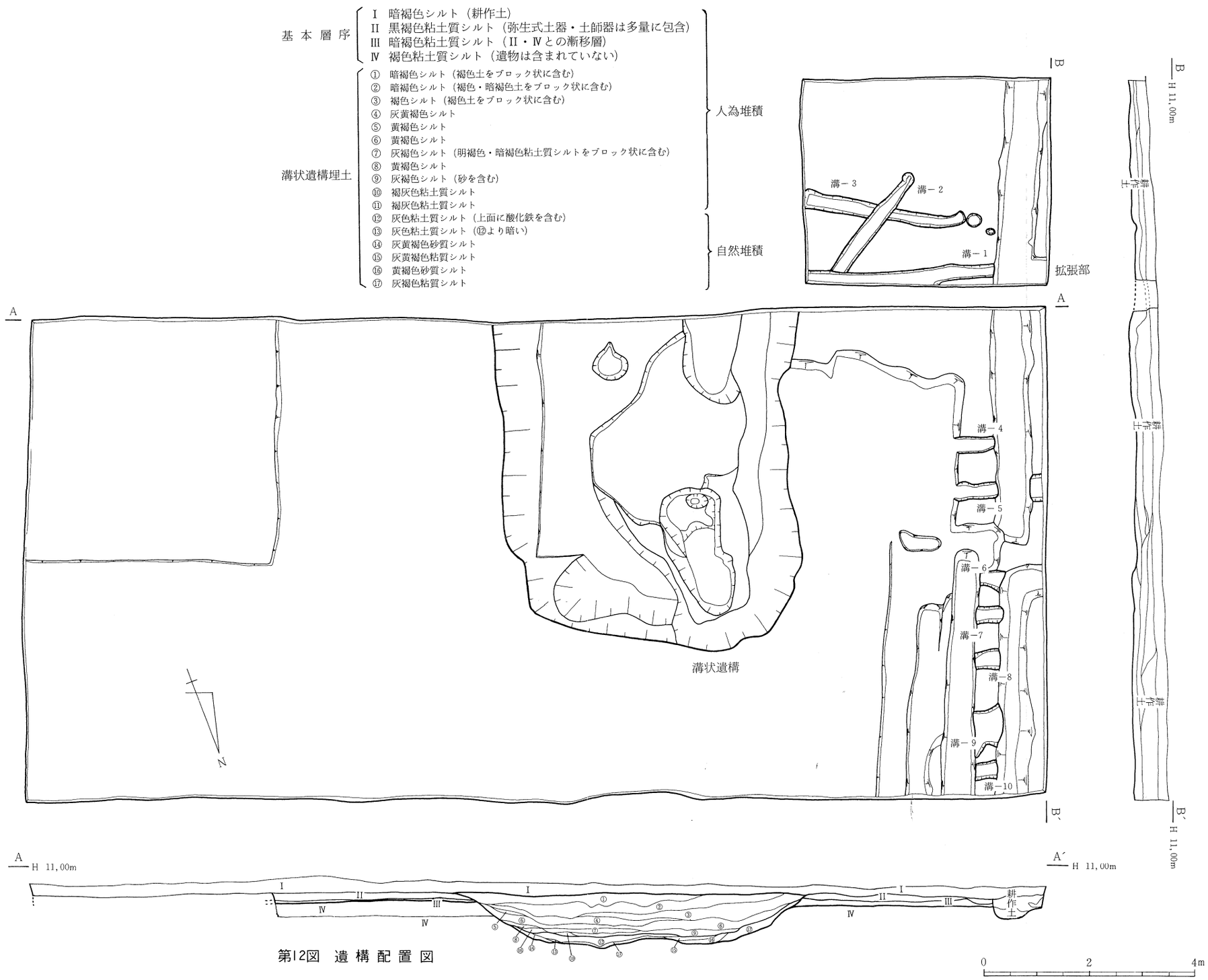
〔方向と大きさ〕

方向は南北を向き、北側は立上る。トレンチ内では南北６ｍを計り、さらに南側に延びる。東西幅は5.5m前後で多少の出入がある。中央部の深さは、確認面から60cm前後である。南端の最も低い所では第Ⅱ層上面より 105cm程下がる。

〔壁面と底面〕

壁面は、底面からゆるやかに立上り、わずかな凹凸がある。底面は北端中央と南側中央とでは20cmの差があり南側が低くなっている。また底面にも凹凸があ

写真17　溝　状　遺　構


基本層序
Ⅰ 暗褐色シルト（耕作土）
Ⅱ 黒褐色粘土質シルト（弥生式土器・土師器は多量に包含）
Ⅲ 暗褐色粘土質シルト（Ⅱ・Ⅳとの漸移層）
Ⅳ 褐色粘土質シルト（遺物は含まれていない）
溝状遺構埋土
① 暗褐色シルト（褐色土をブロック状に含む）
② 暗褐色シルト（褐色・暗褐色土をブロック状に含む）
③ 褐色シルト（褐色土をブロック状に含む）
④ 灰黄褐色シルト
⑤ 黄褐色シルト
⑥ 黄褐色シルト
⑦ 灰褐色シルト（明褐色・暗褐色粘土質シルトをブロック状に含む）
⑧ 黄褐色シルト
⑨ 灰褐色シルト（砂を含む）
⑩ 褐灰色粘土質シルト
⑪ 褐灰色粘土質シルト
⑫ 灰色粘土質シルト（上面に酸化鉄を含む）
⑬ 灰色粘土質シルト（⑫より暗い）
⑭ 灰黄褐色砂質シルト
⑮ 灰黄褐色粘質シルト
⑯ 黄褐色砂質シルト
⑰ 灰褐色粘質シルト
人為堆積
自然堆積
溝－1
溝－2
溝－3
溝－4
溝－5
溝－6
溝－7
溝－8
溝－9
溝－10
溝状遺構
拡張部
耕作土
A
A′
B
B′
H 11.00m
N
0
2
4m

第12図 遺構配置図

り、不定形な溝状に一段下っているが、全体としてゆるやかな弧状を呈す。

〔埋土〕

埋土17層に細分される。上層の①～⑪層までは人為に埋られた層と観察される。⑫層～⑰層までは自然的な堆積と観察された。⑫層上面には鉄分が酸化して薄層をなしており、この層を基底として水が溜っていた時期のあったことも考えられる。底面の溝状の部分には、炭化物を含む暗褐色土が薄く部分的に分布する。底面は粘土を含む荒いシルト層（第Ⅳ層）である。

〔出土遺物〕

①～⑪層からは、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、鉄製品の各破片が出土した。⑫～⑰層中からは、土師器片と弥生式土器片が出土している。この弥生式土器片は一括して遺構中央よりやや西に寄った底面から出土した。（写真18）

写真18　弥生土器出土状況

ロ）　小形溝群

小形溝群は、トレンチ西側と、拡張部で発見された。トレンチ西側で検出された小形溝は、天地返しを受けていない部分に、長さ40cmから80cm程度残存するだけである。拡張部での小形溝の確認面は第Ⅲ層上面である。

溝は10条発見されたが、溝－２以外は東西方向に延びる。溝の幅は上面で30cm前後であるが、溝－９だけは60cmと幅広である。断面形はいずれもＵ字状を呈する。

拡張部の３条は、新しいものから１、２、３と重複しているが、他の７条（溝－４～10）は、40cm～70cmの間隔で並んでいる。溝－１～９の埋土は、黒褐色粘土質シルトが一層堆積しているが、底面に近くなると褐色土の小ブロックをわずかに混入する。溝－10の埋土は他の小形溝に比してやや明るい。小形溝の埋土は、概して第Ⅱ層の土性と類似する。小形溝からは、弥生式土器片と土師器片が出土したが、

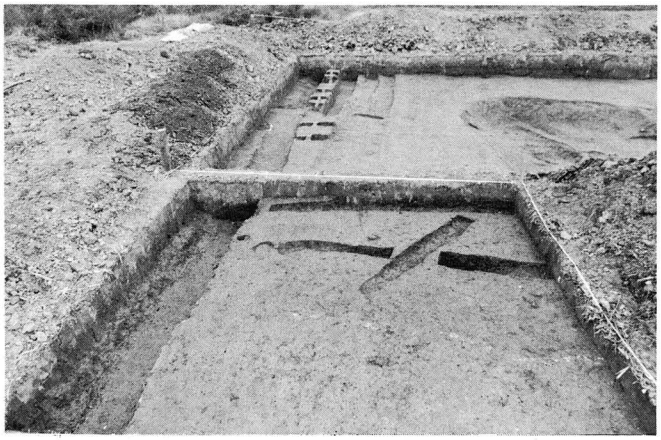
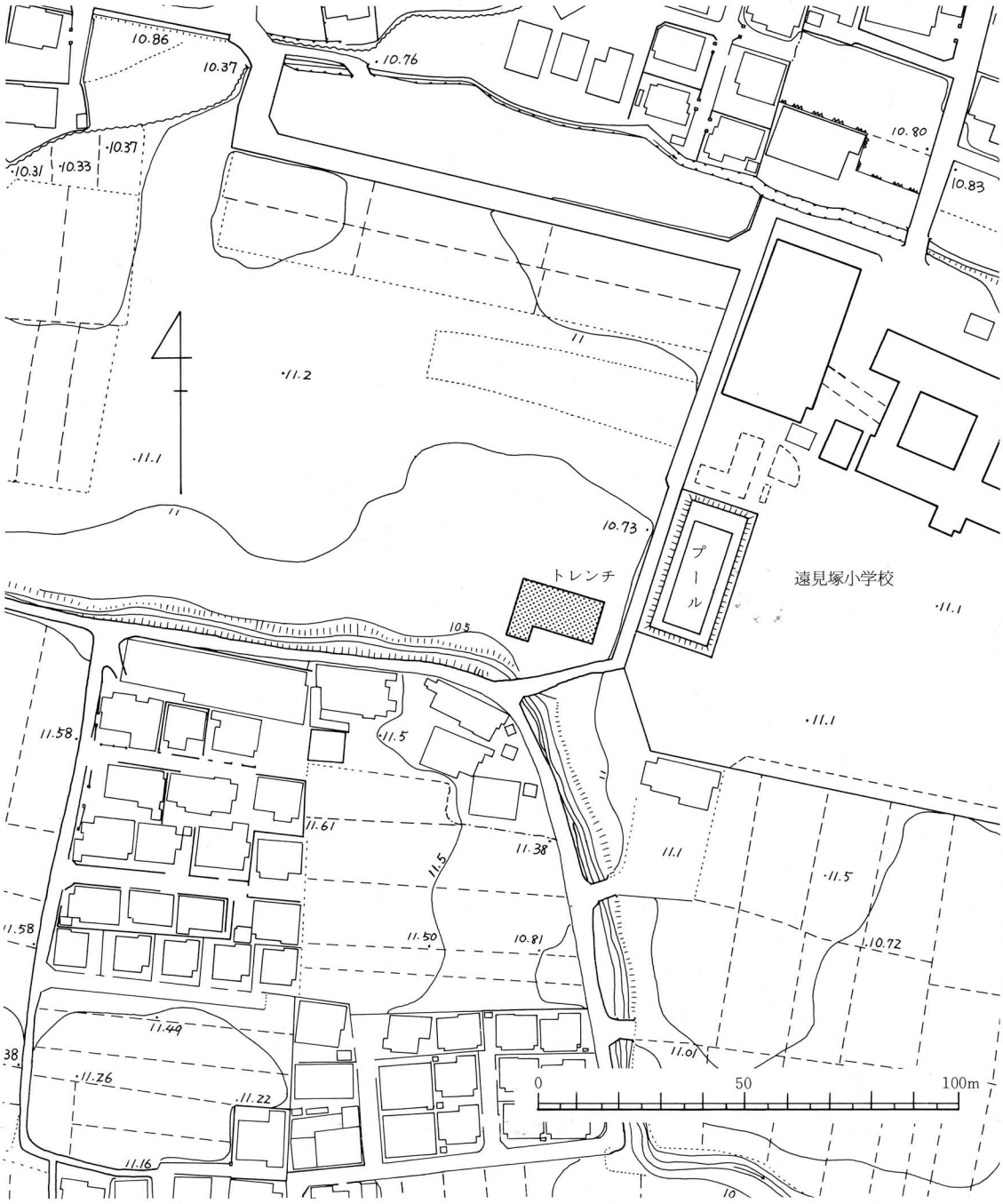


写真19　小　形　溝　群


10.86
10.37
10.76
10.80
10.83
10.31
10.33
10.37
11.2
11.1
10.73
トレンチ
プール
遠見塚小学校
10.5
11.58
11.5
11.61
11.38
11.1
11.5
11.50
10.81
10.72
11.44
11.01
11.26
11.22
11.16
0
50
100m

第13図　地　形　図

量は多くない。(発掘調査出土遺物目録参照)

土師器はロクロを使用したものはない。

(4) 出 土 遺 物

出土遺物には、弥生式土器、土師器、須恵器、瓦、石製品、鉄製品がある。土器の類は破片だけで、原形を留めるものはなく、また図上にて復元できるものもない。

イ) 弥生式土器

弥生式土器は、発掘調査出土遺物目録No.49 (図14－1、写真20－1) が溝状遺構底面より出土したほか、No.16 (図14－5)、No.27 (図14－6、写真20－5)、No.53、No.83の小片が出土したに過ぎない。

No.49は、肩部に最大径をもつ甕で、口縁部は欠損し、体部3分の1と底部が残る。体部の上位から中位には細かなＬＲの縄文が、横方向へ下から上に向って2.5cm四方くらいの単位で施される。下位はヘラケズリによって調整されている。底面には、細かな布の圧痕が観察される。桝形式であろう。

No.27は溝－2より出土した。甕の肩部片と考えられる。外面には、右下がりの斜方向に4条の平行する細くて浅い沈線文が施されている。

ロ) 土師器

土師器は遺物中で、最も多く出土したが、いずれも破片であって、全体を知ることのできるものは出土しなかった。破片で図化できたのは、No.17、No.22、No.35の3点である。

No.17 (図14－4、写真20－4) は、甕の口縁部片で、口径20cm程である。器面は風化しているが、内外面にヨコナデの痕跡を留める。

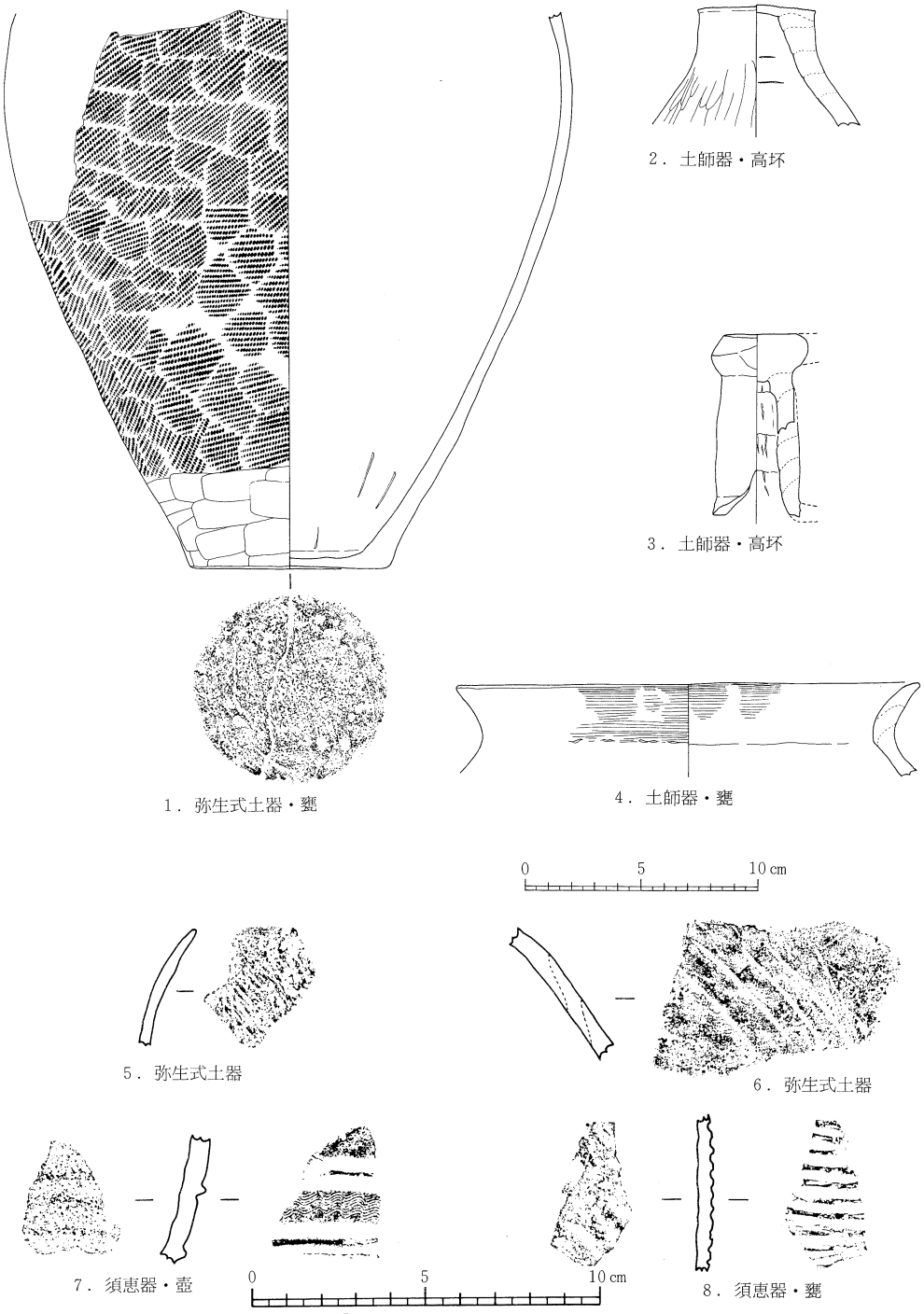
No.23 (図14－2、写真20－3) は、高坏の脚部片である。外面の縦位のヘラミガキ調整がなされている。

No.35 (図14－3、写真20－2) は、高坏の脚部である。坏の底となる上端部はかなり磨滅している。全体が赤く焼けているので2次的な使用がなされた可能性がある。

このほかの土師器片には、内黒の坏の破片も数点見られる。ロクロを使用したと考えられるのは1点だけである。細片の中に、ロクロを使用したものがあったとしても、やはり全体としては、極めて少量であると推察される。

ハ) 須恵器

須恵器は、小片が8点出土しただけである。No.84 (図14－7、写真20－9) は直口壺の頚部

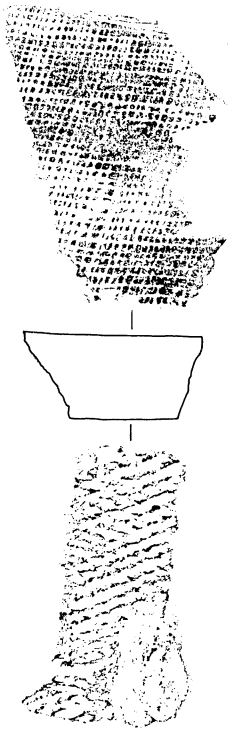


1．(No. 49) 溝状遺構　3．(No. 35) 溝状遺構　5．(No. 16) 2層中（拡張トレンチ）　7．(No. 84) 耕作土出土

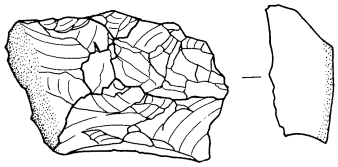
2．(No. 23) 小形溝－3　4．(No. 17) Ⅲ層上面（拡張トレンチ）　6．(No. 28) 小形溝－2　8．(No. 87) 耕作土出土

第14図　出土遺物　その1

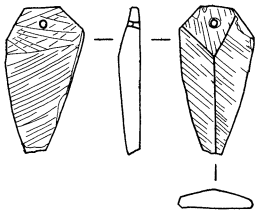
1．須恵器・甕



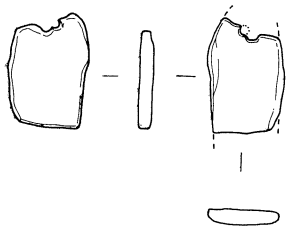
2．平瓦



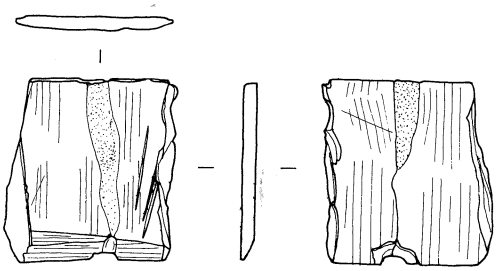
3．フレーク



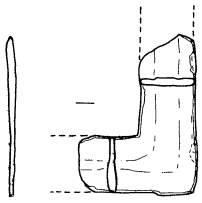
4．剣形石製模造品



5．剣形石製模造品

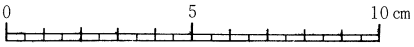


6．石製品



7．鉄製品

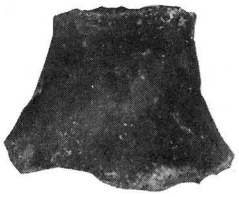
1．(No. 88) 耕作土出土
2．(No. 32) 溝状遺構
3．(No.101) 耕作土出土
4．(No.102) 耕作土出土
5．(No.104) 耕作土出土
6．(No.103) 耕作土出土
7．(No. 44) 溝状遺構

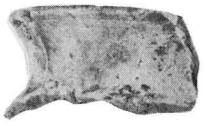


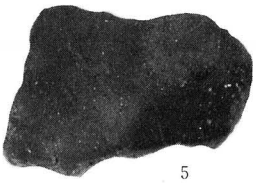
第15図　出土遺物　その2

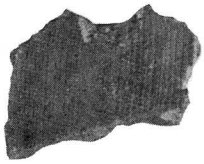
1

2


3


4


5

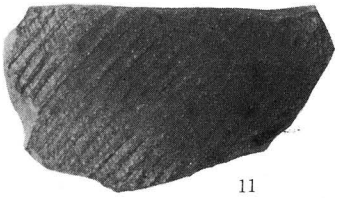

6

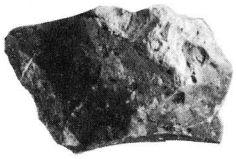
7

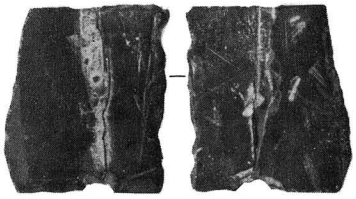
8

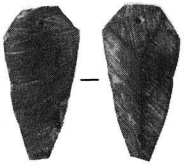
9

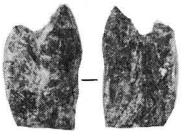
10


11


12


13


14


15

16

1・2・6・7・8・16＝溝状遺構出土
3＝小形溝・3出土
4＝Ⅲ層上面出土
5＝Ⅱ層出土

1. 弥生式土器	(No.49)	6. 平瓦	(No.32)	11. 須恵器	(No.88)
2. 土師器	(No.35)	7. 丸瓦	(No.33)	12. フレーク	(No.101)
3. 土師器	(No.23)	8. 丸瓦	(No.34)	13. 石製品	(No.103)
4. 土師器	(No.17)	9. 須恵器	(No.84)	14. 剣形石製模造品	(No.102)
5. 弥生式土器	(No.28)	10. 須恵器	(No.87)	15. 剣形石製模造品	(No.104)
				16. 鉄製品	(No.44)

写真20　発掘調査出土遺物

片で、２本の隆帯の間に細かな波状沈線文が施されている。

二）　陶磁器

陶磁器は、耕作土中から24点の破片が出土した。いずれも近世以降のものである。

ホ）　瓦

瓦は６点出土した。溝状遺構から出土したNo.32、No.33、No.34は古代のもので、耕作土から出土したNo.50、No.51、No.91の３点は近世以降のものである。

平瓦No.32（図15－２、写真20－６）は、凹面に布目、凸面に縄目がある。No.33、No.34は丸瓦の玉縁部で、No.33（写真20－７）の凹面はケズリ、No.34（写真20－８）の凹面は布目圧痕である。

ヘ）　石製品

ａ．フレーク

No.101（図15－３、写真20－12）は、原石の表面部分をわずかに残すフレークである。色調は茶褐色を呈し、中に小さな石英を多数含んでいる。流紋岩製。

ｂ．剣形石製模造品

No.102（図15－４、写真20－14）は、剣先部をわずかに欠損する。残存長3.9cm、最大幅2.0cm、厚さ0.4cmを計る。全体は五角形を呈し、片面は平らで、片面は鎬状の稜をもつ。紐穴は両面から穿孔され、鎬（しのぎ）をもつ面からは垂直に、反対の平らな面からは斜めに穿孔されており、接点はわずかにずれている。平らな面から斜めに穿孔されているのは、反対の稜を造り出した後、片側に製品を傾けて穿孔したことによるものであろう。滑石製。

No.104（図15－５、写真20－15）は、両端部を欠損する。残存長3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。磨滅が著しい。鎬が造られたかは不明である。中軸線より片寄って穿孔されている。No.102と同様滑石製であるが、銀白色の結晶質のものが縞状に入っている。紐ずれが認められる。

ｃ．その他

No.103（図15－６、写真20－13）は、粘板岩製の偏平な石で、残存長4.4cm、幅4.8cm、厚さ0.5cmを測る。表面に擦痕が観察される。片側には一面から刀状に削った痕跡があるが、十分に鋭くはない。

ト）　鉄製品

鉄製品は全て小破片で、12点出土した。

No.44（図15－７、写真20－16）は、溝状遺構から出土した。幅1.4cm、厚さ0.25cm程の薄い板状のもので、直角に曲っている。両端が折れており、形状は不明である。

（5） ま と め

本調査においては、耕作による攪乱が著しく、調査地点の保存状態が良くなかったために、当初の目的を十分に達成することができなかった。しかしながら、一部で基本的な層序を確認でき、また２種の遺構を調査することができたことは、南小泉遺跡の包括する歴史的、文化的価値を知る手掛りを増したと言える。

調査成果としては、今後への課題を含めて、次の各点がある。

①南小泉遺跡の基本層序については、「仙台市史３」に伊東信雄氏が、仙台飛行場の西部について『地表下30～40cmが黒褐色の耕土層で、その次に黒土層があり、黒土層の下が地盤である粘土層になっている。黒土層の厚さは所によって異なり、粘土上の土が全部耕土となって黒土層を欠くところもあり、厚い所では60cmに及ぶ所もある。

遺物は耕土層中に含まれ、その中黒土層に多く粘土層中には何も見られない。おそらく黒土層中のものがオリジナルなものであって、上の耕土層中にあるものは耕作の際にこれが攪乱されて動いたものであろう。』と報告されている。

黒土層、粘土層はそれぞれ本調査の第II層と第Ⅳ層にあたる。これにより遺物包含層である黒褐色土層（黒土層）は、南小泉遺跡の東部から西部にわたって広く分布することが明確になった。

②溝状遺構は、底面から弥生式土器が出土し、上部人為堆積層からは平安時代と考えられる瓦が出土している。両遺物の時間的差は著しい。しかし、溝状遺構の掘込み面が第II層上面であることを考えれば、この遺構は、平安時代かあるいはこれに近い時期のなんらかの土木事業の跡と考えられる。弥生式土器は後世に落ち込んだものであろう。

③小形溝群と同様の遺構は、南小泉遺跡のほかに、同年仙台市内で調査された安久東遺跡及び六反田遺跡においても発見されている。両遺跡とも、褐色土層の上に堆積した黒褐色土層中から、あるいはこの黒褐色土を排除した褐色土層上面で確認されている。３遺跡とも、幅30cm前後で、褐色土層を15cm位掘込んで、規則的に並んでいる。時期は、南小泉の場合には、弥生時代以降、平安時代以前という大きな枠の中でしか、現時点では考えられない。安久東遺跡では、平安時代の住居に切られていた。六反田遺跡では、奈良時代から平安時代中頃と考えられている。

遺構の性格については、的確な指摘はできないが、いずれの遺跡も沖積地に立地し、現在は耕地となっている。それに加えて遺構の形状が、現在行なわれている天地返しの跡に似ていることは興味深い。この点、今後さらに検討が必要であろう。

3．5世紀の須恵器について

これまでは古式土師器や石製模造品が古墳時代の遺物として知られていた。遠見塚古墳が土取りで破壊されたときに粘土槨から出土したといわれるものも1個の土師器の壺であり、須恵器について報告、記載されているものはなかったと思う。

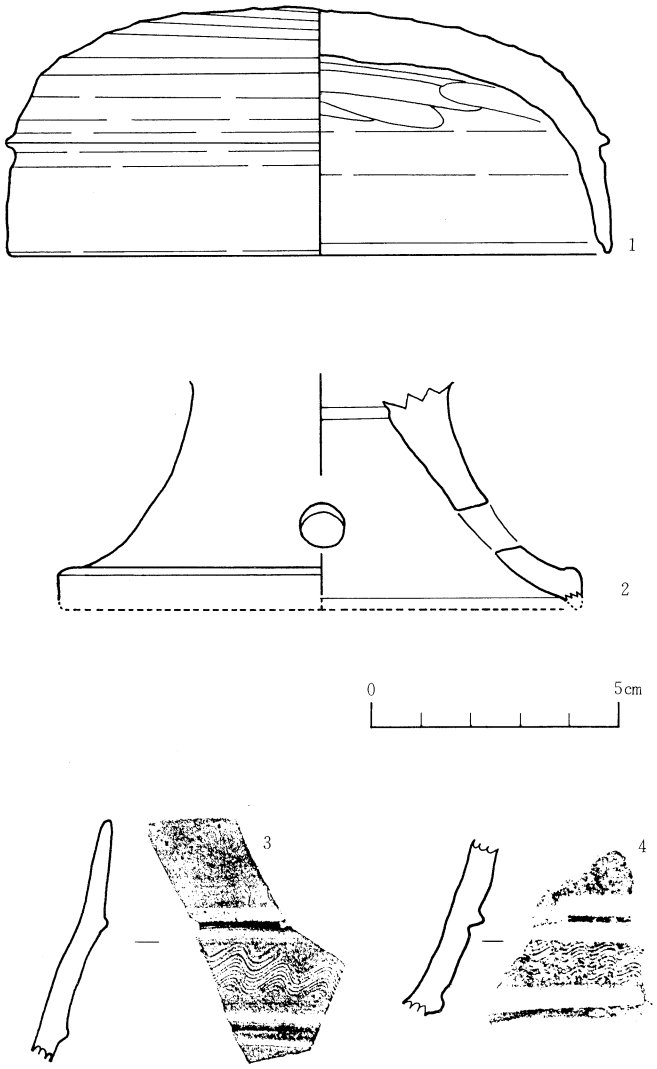
ここ近年になって、仙台市の北部、台ノ原・小田原丘陵の一角（仙台市原町小田原案内）で5世紀の須恵器窯（註1）が発見されてから注目されるようになってきて、今回実施した発掘調査及び分布調査においても若干ではあるが貴重な須恵器片の発見があるので、ここに6例を引き、若干の所見を述べたい。

〈第1例〉　蓋

東北大学所蔵のものである。この蓋は霞ノ目飛行場拡張工事の際出土したものであり、蓋杯の蓋に当たるものと思われる。直径12.2cm、高さ5.0cmを測る。肩部に浅い一条の沈線と隆帯がめぐり、全体がロクロ調整を受けている。天井部は回転ヘラ削りで、内面天井部はヘラナデされている。色調は内外とも灰色で、胎土に2～3mmの砂粒を若干含む。焼成は良好で堅緻である。第16図1。

〈第2例〉　高杯脚片

古窯跡研究会所蔵である。約4分の1の脚



第16図　南小泉遺跡の須恵器(1)

の破片であるが、２つの円窓が若干残っているので、４つの円窓をもつものと思われる。内外面ともロクロ調整を受けている。脚基底部は断面三角形を呈している。色調は内外面とも暗灰色で、胎土は良好、緻密である。第16図２。

〈第３例〉　直口壺片①

古窯跡研究会所蔵のもので、５×2.5cm位の口縁部破片である。２重の隆線がめぐり、その隆線間に細かい波状沈線が施文されている。内外面とも黒っぽい灰色で、断面は赤褐色を呈する非常に焼きの状態がよく、胎土も良好で緻密である。全体がロクロ調整されている。第16図３。

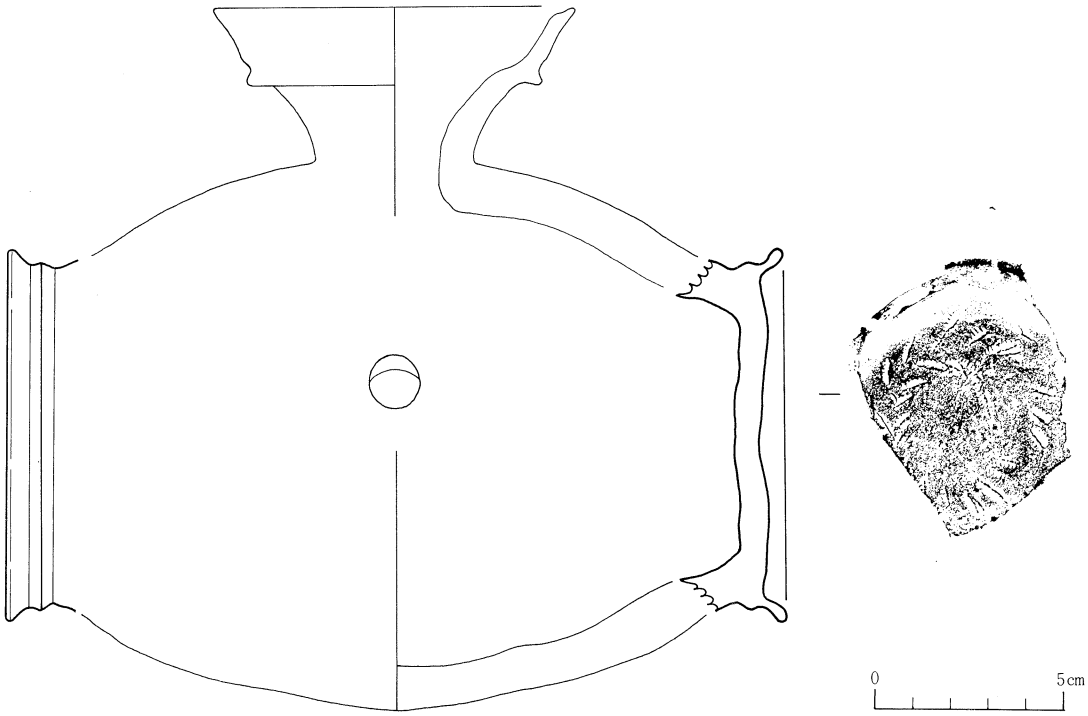
〈第４例〉　直口壺片②

今回の発掘で出土した直口壺片。口唇部がないので直口壺片と決定するには若干の危険があるが、第３例とほぼ同様の形を示すので直口壺片としておく。

第３例同様、２本の隆線とそれに挟まれた波状沈線が施文されている。隆線の湾曲状況から第３例のものより口縁部は外反するようである。色調は内面が明灰色、外面が灰色。胎土は砂粒が混入して焼きもあまく、なんとなくもろい感じがする。破片は約3.5cm一辺の三角形を呈するものである。外面を見るとロクロ調整されていることが僅かにわかる。第16図４。

〈第５例〉　樽形瓶片

分布調査で表採したもので、樽形瓶端部の円盤部破片である。円盤部外面には列点渦巻状の



第17図　南小泉遺跡の須恵器(2)

圧痕があり、内面はヘラで左まわりにナデつけてある。円盤部周囲は胴部との接点で断面三角形の隆帯が、その外には唇状に薄く引き出されたものが、高台付の杯の台のように形作られている。色調は胴部外面は黒釉がかかっているように見え、内面及び円盤部内外面は灰色を呈している。焼成、胎土とも非常に良好である。第17図。

写真21　南小泉遺跡の須恵器(3)

〈第６例〉　甕

これは第１例同様飛行場拡張工事の際の出土遺物であるが、実物の存在は不明である。これは陸上自衛隊霞ノ目駐とん地内にある防衛館に展示されてあった写真の複写であり、その説明書きによると所有者は大友義一氏となっているが住所等はわからない。

実物がないので細い観察等はできないが、形態から見ると大蓮寺窯跡出土の甕に類似している。胴部中央で最大径になり、そこを中心に施文されている。まず穴をあけただけの注口、列点状圧痕帯及びそれを挟む２条の沈線が特徴的である。写真21。

これら６つの遺物は古い形態の須恵器であり、５世紀後半から６世紀初頭にかけてのものと考えられる。もちろん発掘や表採で平安時代と思われる須恵器も発見されているのであるが、これら古手の須恵器は南小泉遺跡の古墳時代の上限を語る重要な資料となると思われる。

第５例の樽形甕片は仙台市西部の金山窯跡からも発見されており、また最近になって、当市で発掘調査した裏町古墳（註２）の遺物を再検討した結果、樽形甕片もあることが指摘されている。(註３)

第２例にあげた直口壺片は他の物と比較して非常に出来が良く、地元製産が確実な大蓮寺窯跡、金山窯跡出土の遺物に比べても、地方色を感じさせない遺物といえる。

（註１）古窯跡研究会「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」(陸奥国官窯跡群II）昭和51年５月参照。

（註２）仙台市教育委員会「裏町古墳発掘調査報告書」昭和49年３月参照。

（註３）古窯跡研究会の渡辺泰伸氏の御教授による。

Ⅳ．範囲確認調査を終えて

今回の調査報告が少しでも学術的な資料となり、また行政的な見地からもいろいろ今後の保護対策について示唆してくれたものと思う。

①水平的広がりとしては分布調査でもふれているが、遠見塚古墳を位置的な中心として、東西に長い広がりをみせている。密度については、遠見塚古墳南域から、霞ノ目飛行場西南地域が密度高く、北方及び西方に薄くなっている。この点から判断すると、南小泉遺跡内では、特に東南地域に各時代の生活の場が重複しているようである。

②垂直的な見方としては、分布調査して畑地から土器等が表土採集されるということは、包含層が現地表からさほど深くないことを意味しているとも考えられるし、またかつて天地がえししたところもあることから、１ｍ前後の深さにある遺物包含層であっても、現在の畑の土に遺物が破片となって混入しているものもあることが、容易に考えられる。しかし今回発掘調査した地点では、天地がえしのされていなかった部分の、地表下約20cmで古式土師器の包含層に達していることからして、この地域に限定することとなるが、現地表近くに包含層が残存しているか、もしくは存在していたものといえる。

③時間的な面から見ると、出土、表採遺物の分類から、弥生時代から平安時代にかけての遺跡ということが出来る。

以上全体的なことを簡単にまとめてみた。

V．参考・引用文献

1．奥津春生「仙台飛行場遺跡より発掘された植物遺體について」古代文化第14巻第１号

2．日本考古学協会「弥生式土器集成」Ⅰ，Ⅱ

3．志間泰治「鱸沼遺跡」東北電力株式会社宮城支店

4．伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」仙台市史３

5．伊東信雄「古代史」宮城県史１

6．仙台市教育委員会「裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第７集

7．仙台市教育委員会「史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第11集

8．仙台市教育委員会「史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第12集

9．中村五郎「東北地方南部の弥生式土器編年」東北考古学の諸問題

10．古窯跡研究会「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」陸奥国官窯跡群Ⅱ

11．田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ

12．東京天文台編纂「理科年表」昭和53年

13．伊東信雄「稲作の北進」古代の日本８東北

14．伊藤玄三「五世紀の古墳」古代の日本８東北

15．伊藤玄三「弥生文化」東北の歴史（上巻）

16．高橋富雄「仙台平野の夜明け」宮城県の歴史

17．仙台市教育委員会「仙台の文化財」(正編)

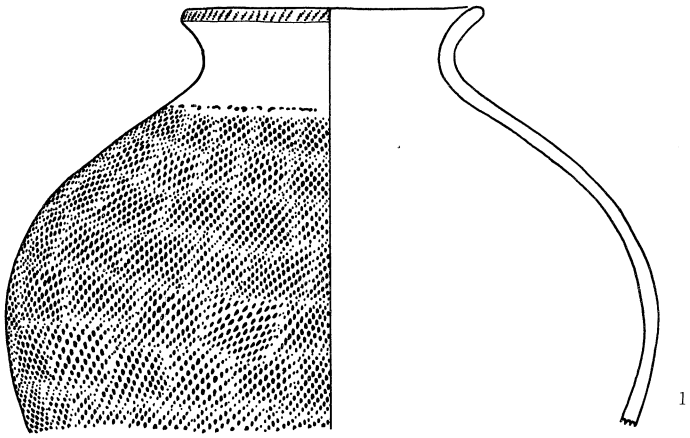
18．仙台市史続編編纂委員会「古代の仙台地方」仙台の歴史

19．仙台市史図録編纂委員会「目で見る仙台の歴史」

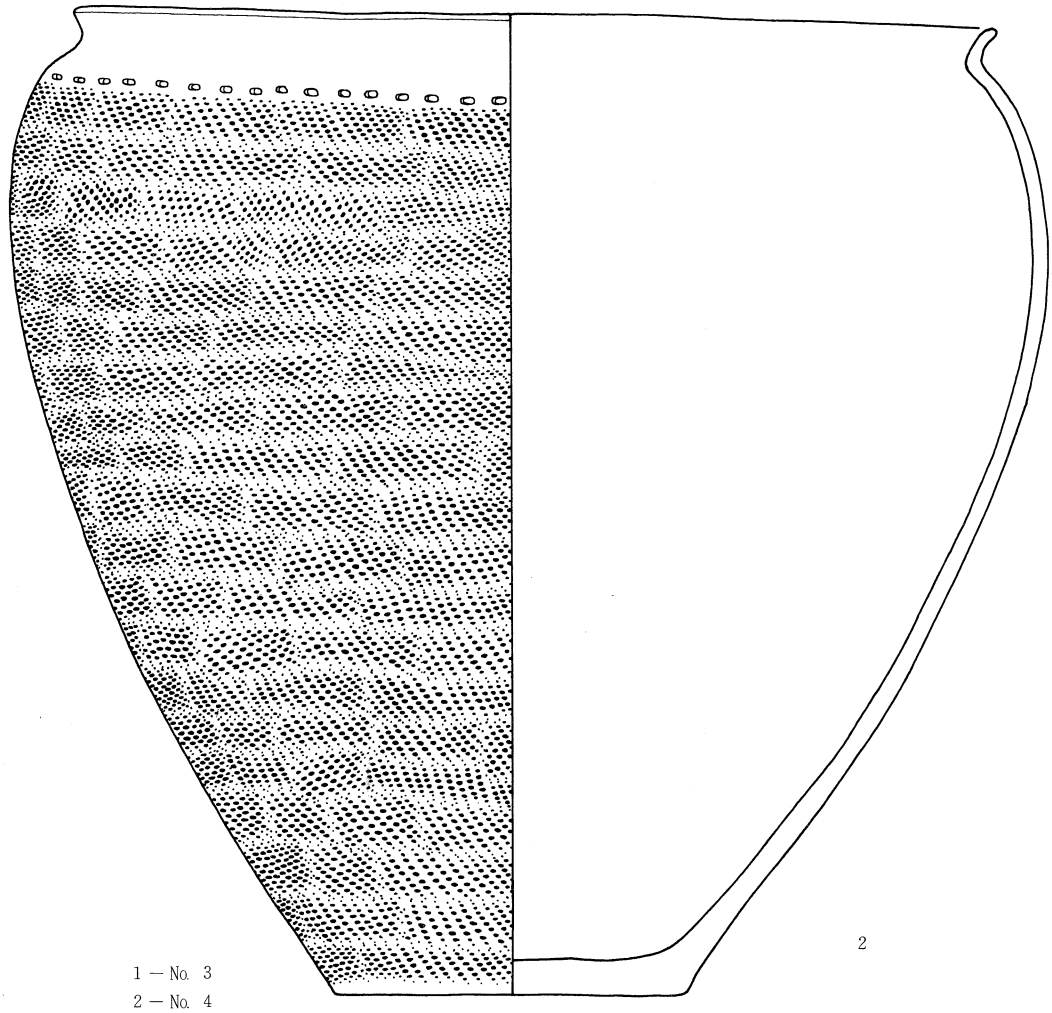
20．奥津春生「大仙台圏の地盤、地下水」

Ⅵ. 図　版・目　録

図版１～12に掲載した遺物は今回の発掘調査で出土したものでなく、霞ノ目飛行場出土のものを主として過去に出土していたものであり、この機会に東北大学、東北学院大学の協力を得て実測、写真撮影したものである。



1

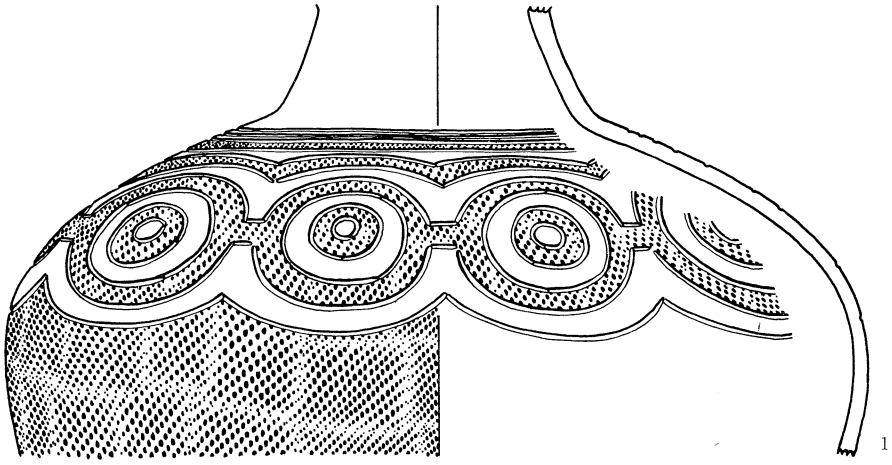


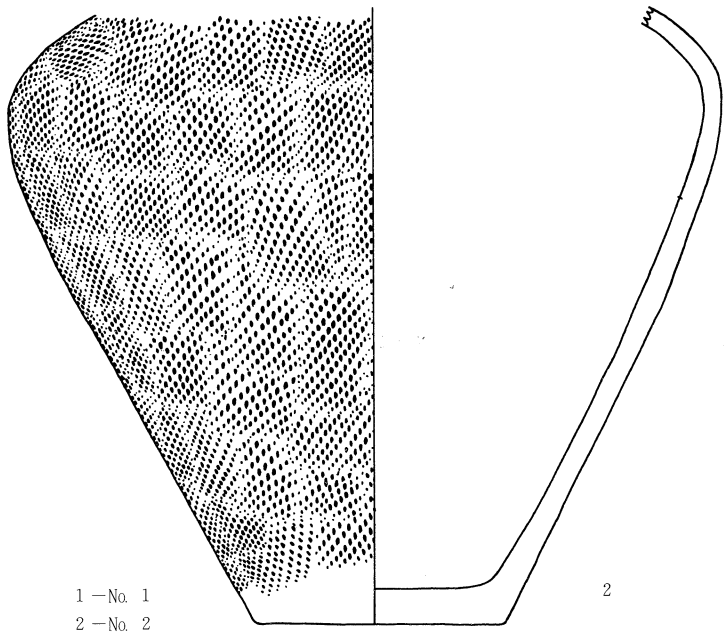
2

1 — No. 3
2 — No. 4

図版 1

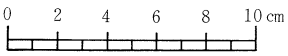
0 2 4 6 8 10 cm

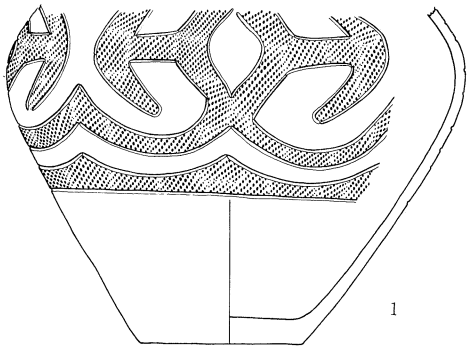


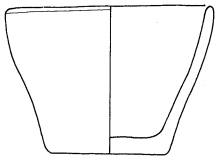


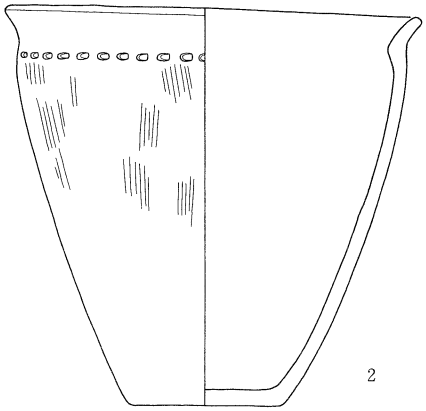
1 ―No. 1
2 ―No. 2

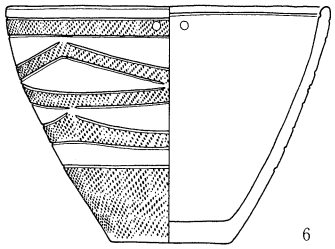
図版　2

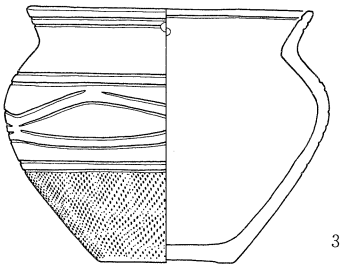


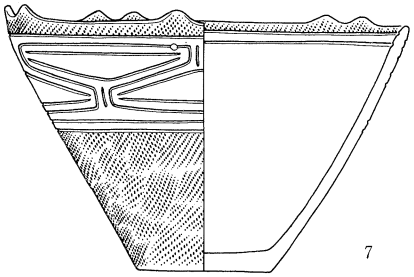


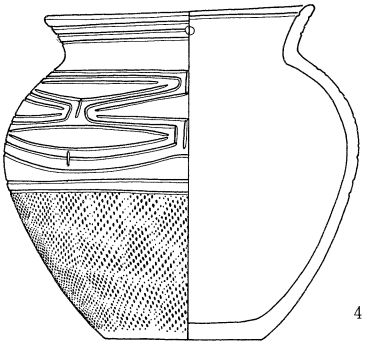




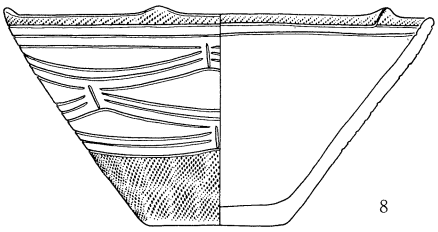


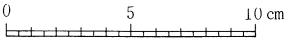




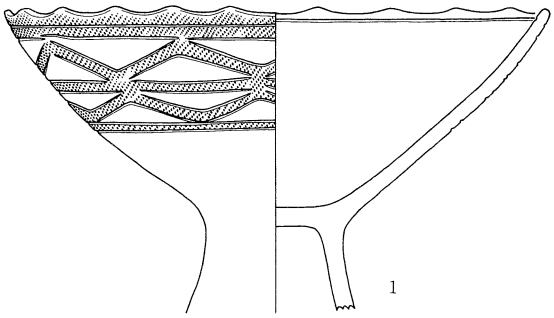


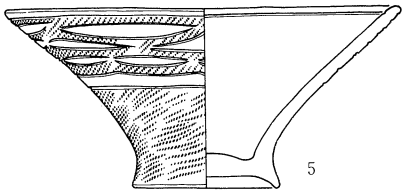
1 —No. 5
2 —No. 6
3 —No. 7
4 —No. 8
5 —No. 9
6 —No. 10
7 —No. 11
8 —No. 12

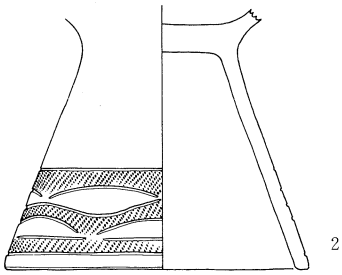


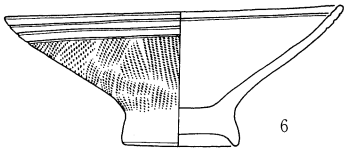


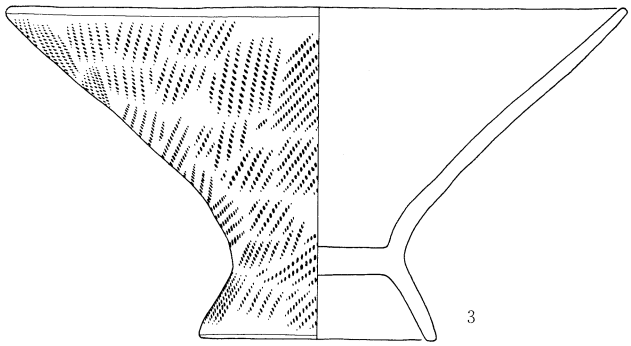
図版　3

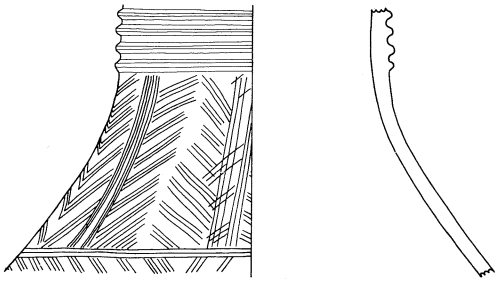


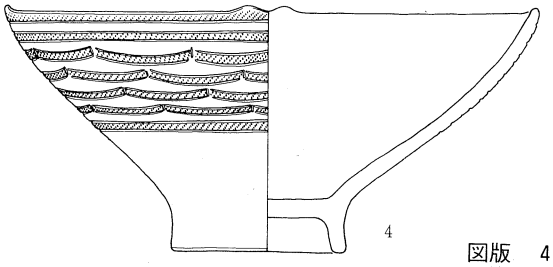








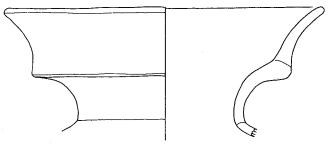




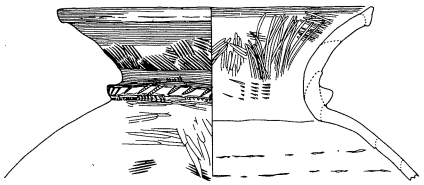
1 —No. 13
2 —No. 14
3 —No. 15
4 —No. 16
5 —No. 17
6 —No. 18
7 —No. 19

0 5 10 cm

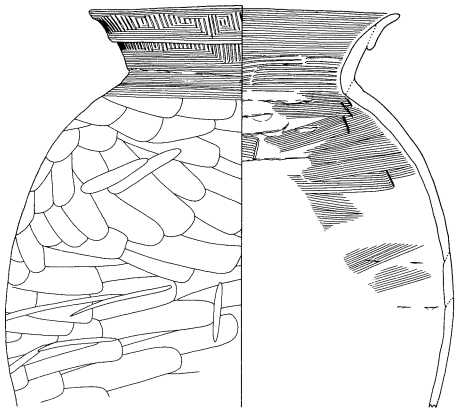
図版 4



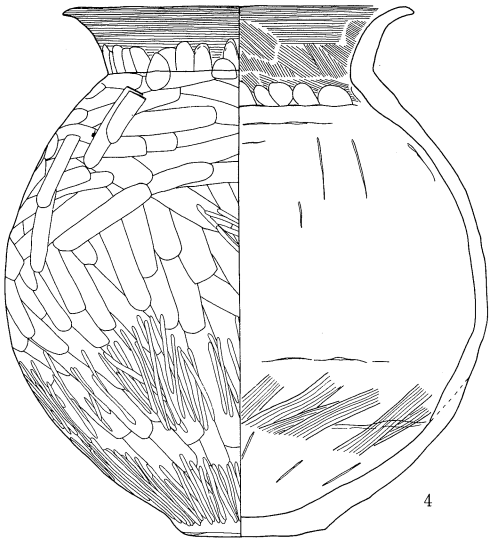
1



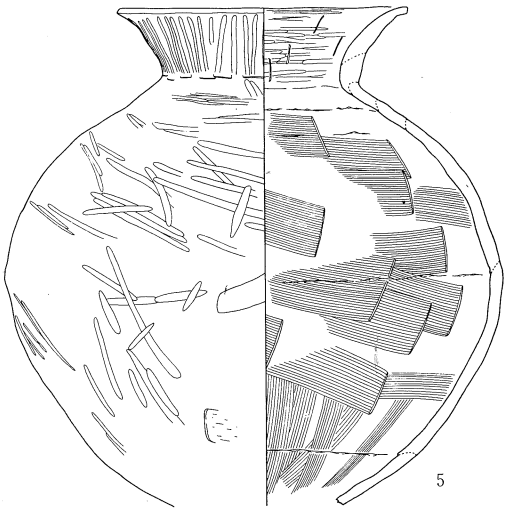
2



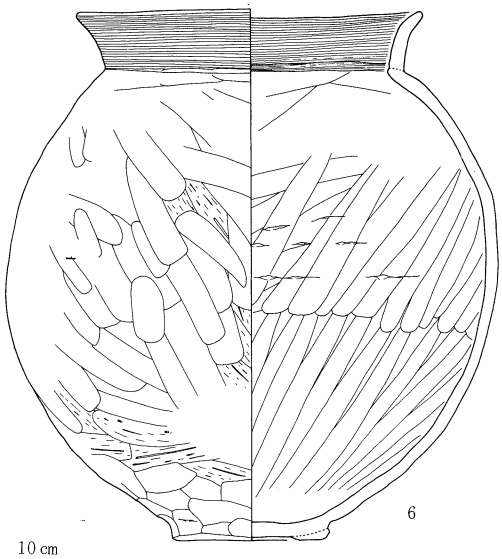
3



4



5

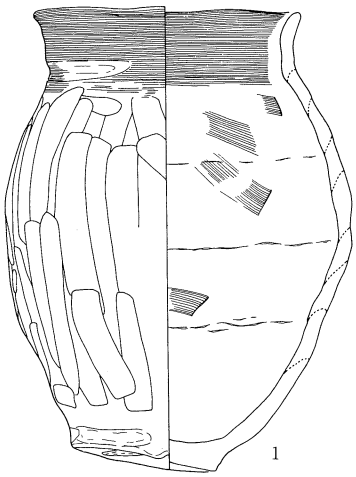


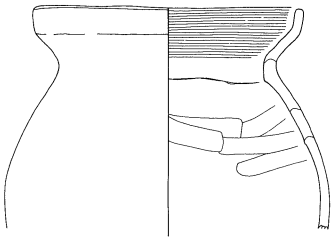
6

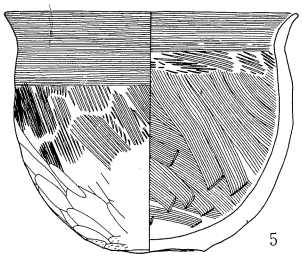
1 —No. 20　　4 —No. 23
2 —No. 21　　5 —No. 24
3 —No. 22　　6 —No. 25

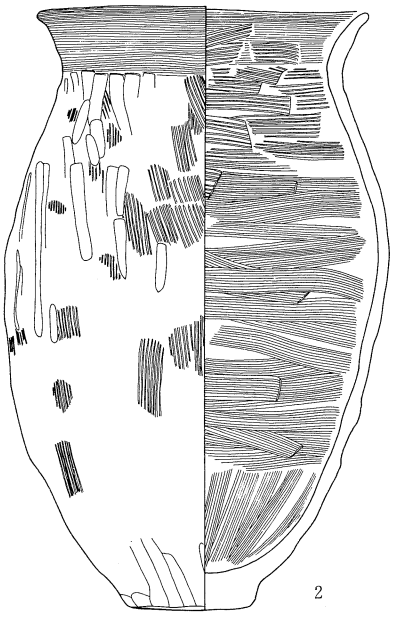
0　5　10 cm

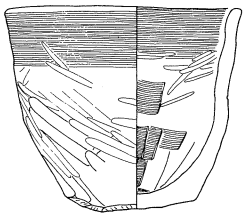
図版　5

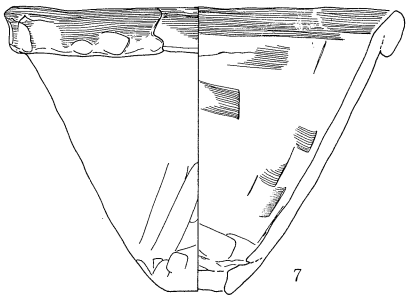


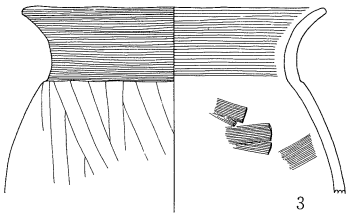


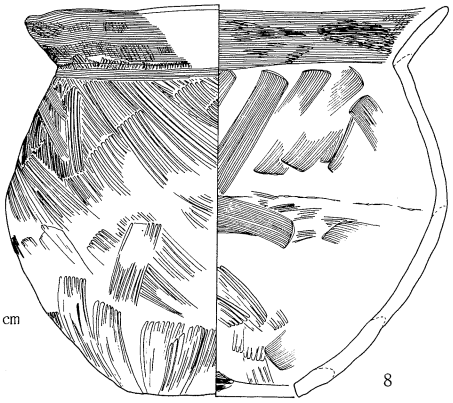








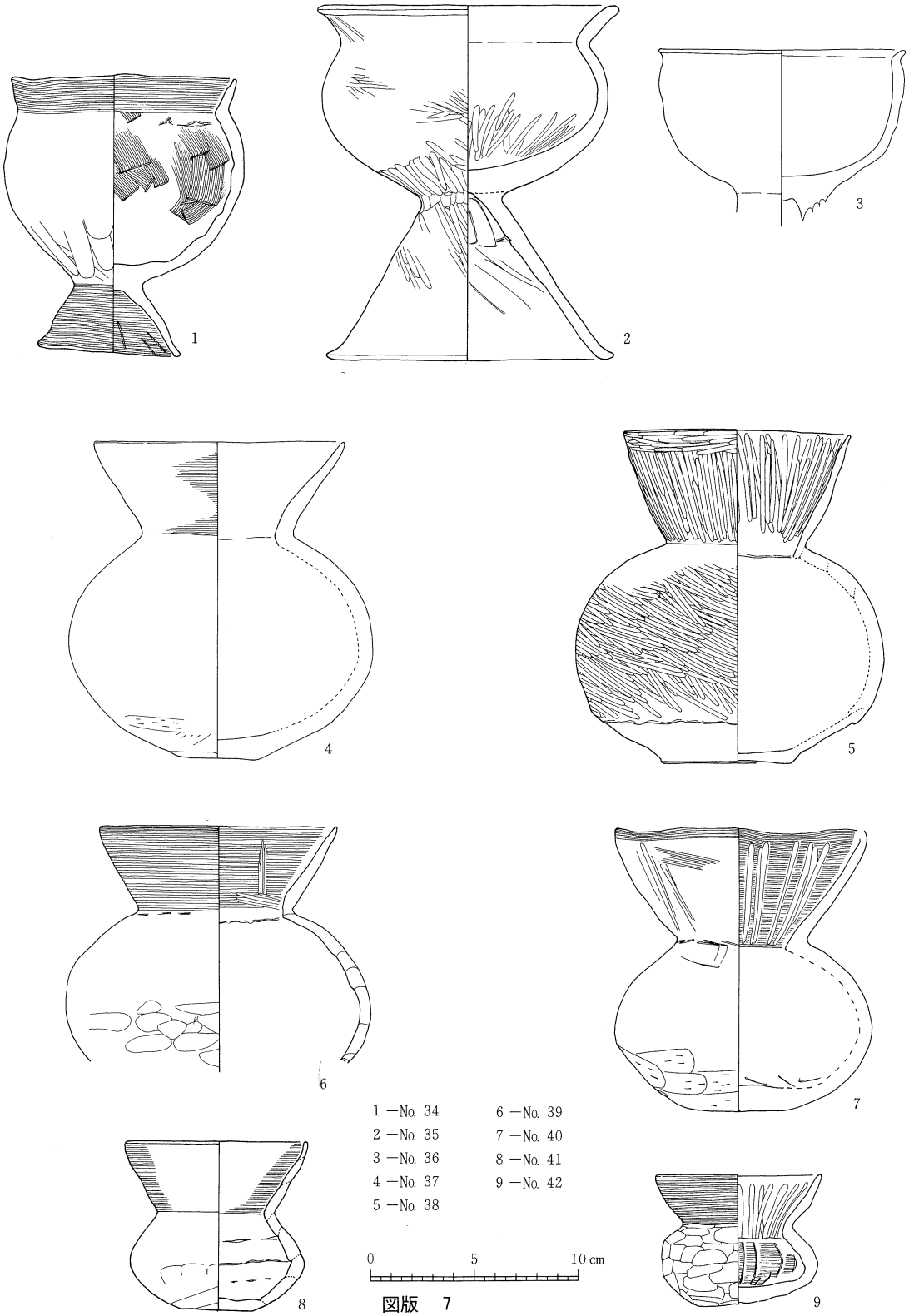




1 —No. 26
2 —No. 27
3 —No. 28
4 —No. 29
5 —No. 30
6 —No. 31
7 —No. 32
8 —No. 33

0 5 10 cm

図版 6

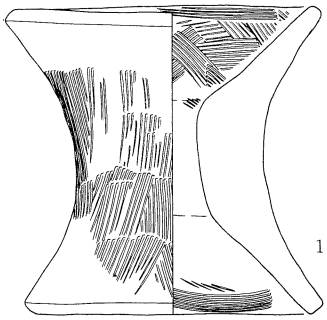

1
2
3
4
5
6
7
8
9
1 —No. 34
2 —No. 35
3 —No. 36
4 —No. 37
5 —No. 38
6 —No. 39
7 —No. 40
8 —No. 41
9 —No. 42
0
5
10 cm

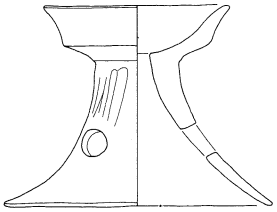
図版　7

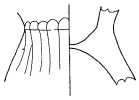
1 —No. 43　5 —No. 47　9 —No. 51
2 —No. 44　6 —No. 48　10—No. 52
3 —No. 45　7 —No. 49　11—No. 53
4 —No. 46　8 —No. 50

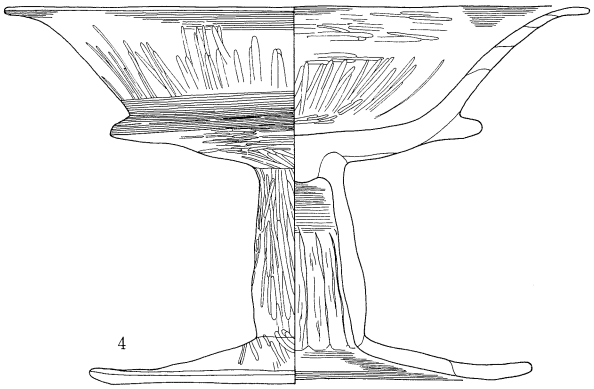
0　5　10 cm

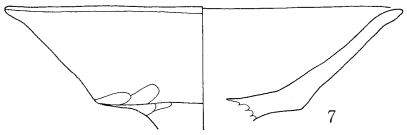
図版　8

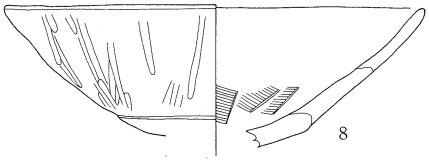


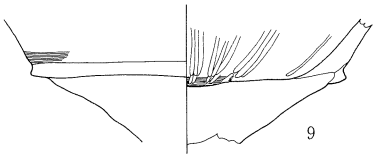


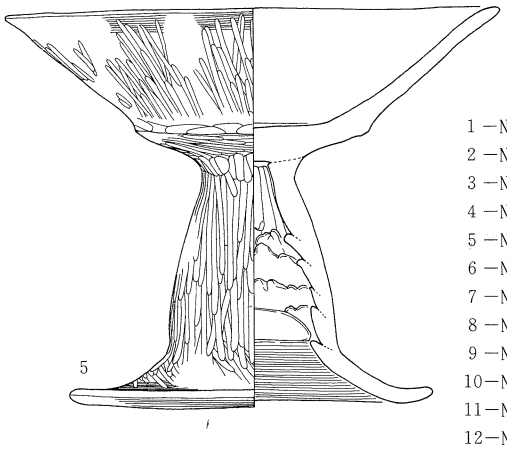




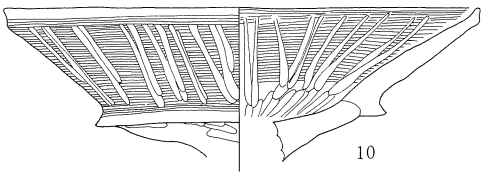


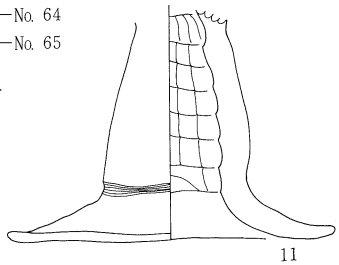


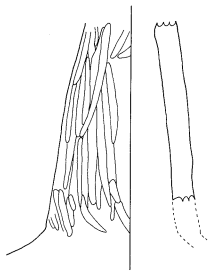


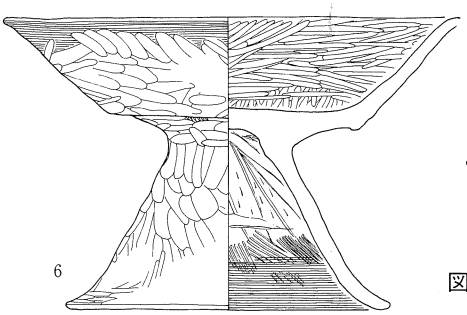


1 —No. 54
2 —No. 55
3 —No. 56
4 —No. 57
5 —No. 58
6 —No. 59
7 —No. 60
8 —No. 61
9 —No. 62
10—No. 63
11—No. 64
12—No. 65









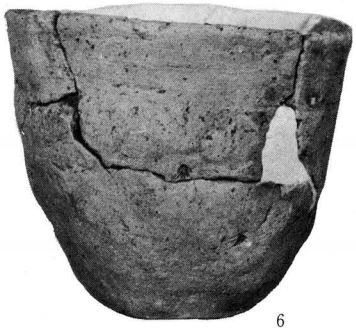
0 5 10 cm

図版 9

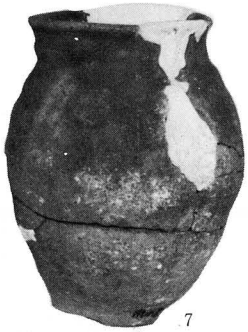
1

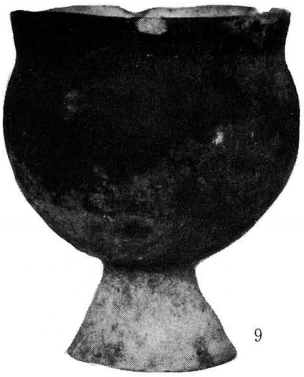
2

3


6

4


7


9

5

8

1 —No.22
2 —No.21
3 —No.23
4 —No.25
5 —No.24
6 —No.31
7 —No.26
8 —No.27
9 —No.34
10—No.35

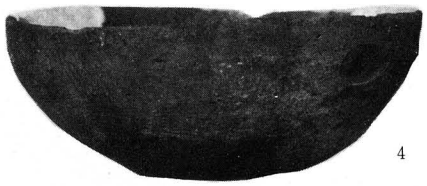
10

図版10　南小泉遺跡出土土器(Ⅰ)土師器

1 —No.44　4 —No.32　7 —No.37
2 —No.45　5 —No.33　8 —No.40
3 —No.43　6 —No.38　9 —No.41

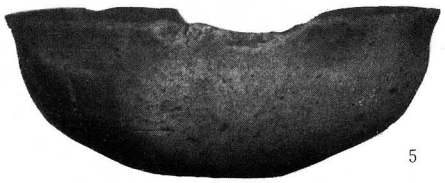
図版11　南小泉遺跡出土土器（2）土師器

1



4

2



5

3

6

8

7

1 ～ 7　土師器・8　須恵器

1 －No.54　3 －No.59　6 －No.53
2 －No.58　4 －No.51　7 －No.52
5 －No.50　8 －第16図 1

図版12　南小泉遺跡出土土器（3）土師器・須恵器

(1)- 遺物図版目録－Ⅰ

No.	図版		種別	器形（形態）	器面調成（主な文様）							備考	保管
					口縁部		頸部	体部		底部			
	図	写真			外面	内面	外面	外面	内面	外面	内面		
1	1－1		弥生式土器	壺形	縄文		無文	縄文				桝形式	東北大学
2	1－2		弥生式土器	甕形	無文		下端に列点刺突文	縄文				〃	〃
3	2－1		弥生式土器	壺形			無文	擦消縄文による同心円文				〃	〃
4	2－2		弥生式土器	甕形				縄文				〃	〃
5	3－1		弥生式土器	甕形				擦消縄文		無文		〃	〃
6	3－2		弥生式土器	甕形	無文		下端に列点刺突文	無文				〃	〃
7	3－3		弥生式土器	壺形	2条の沈線	1条の沈線	無文	沈線による波文		縄文		〃	〃
8	3－4		弥生式土器	壺形	3条の沈線	1条の沈線	無文	沈線による変形工字文		縄文		〃	〃
9	3－5		弥生式土器	鉢形	無文			無文		無文		〃	〃
10	3－6		弥生式土器	鉢形	無文	1条の沈線		3段の連続山形縄文帯		縄文		〃	〃
11	3－7		弥生式土器	鉢形	縄文	（5対の山形突起）		沈線による変形工字文		縄文		〃	〃
12	3－8		弥生式土器	鉢形	縄文	（5つの山形突起）		沈線による連続山形文		縄文		〃	〃
13	4－1		弥生式土器	高坏形	縄文	（波状の山形突起）		連続山形縄文帯				〃	〃
14	4－2		弥生式土器	高坏形						連続山形縄文帯		〃	〃
15	4－3		弥生式土器	高坏形	縄文			縄文				〃	〃
16	4－4		弥生式土器	高坏形	縄文	（4対の山形突起）		4段の連続山形縄文帯		無文		〃	〃
17	4－5		弥生式土器	皿形		1条の沈線		3段の変形連続山形縄文帯		縄文		〃	〃
18	4－6		弥生式土器	皿形	3条の沈線	1条の沈線		無文		無文		〃	〃
19	4－7		弥生式土器	壺形			4段の隆帯	3条の細い平行沈線文				十三塚式	〃

(1) 遺物図版目録－II

No.	図版 図	図版 写真	種別	器形（形態）	遺存（部位）	成形	法量	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	器面調成 口縁部 内面	器面調成 頸部 外面	器面調成 体部 外面	器面調成 体部 内面	器面調成 底部 外面	器面調成 底部 内面	備考	保管
20	5－1		土師器	壺	体部欠損		口径 16.9 頸部径 8.9	浅黄橙色	浅黄橙色	やや軟質	不明	不明	不明					複合口縁	東北学院大学
21	5－2	10－2	土師器	甕	体部欠損		口径 17.0	橙色	橙色	良好	ハケメ ↓ ヨコナデ	ハケメ ↓ ヨコナデ	隆帯 ↓ 櫛目状の刺突文	ハケメ ↓ ヨコナデ	不明				東北大学
22	5－3	10－1	土師器	甕	底部欠損	巻上げ	口径 16.8 頸部径 12.2 体部径 24.1	橙色	橙色	良好 黒斑有り	ハケメ ↓ ヨコナデ	ヨコナデ ↓ ハケメ	ヨコナデ	ヘラケズリ ↓ ナデ	ヘラナデ			折返し口縁	〃
23	5－4	10－3	土師器	甕	完形	巻上げ	器高 28.5 口径 19.0 頸部径 14.3 体部径 25.9 底径 7.7	にぶい橙色	にぶい橙色	良好 一部無斑	ヨコナデ	ヨコナデ ↓ ナデ	ナデ	ヘラケズリ ↓ ナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラナデ ↓ ナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	口縁端部外反体部球形	〃
24	5－5	10－5	土師器	甕	底部欠損		口径 15.3 頸部径 10.5 体部径 26.7	橙色	橙色	良好	ヘラナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ↓ ヘラミガキ	ヘラナデ		ヘラナデ	胎土に粗砂を多く含む 体部球形	〃
25	5－6	10－4	土師器	甕	完形	巻上げ	器高 28.5 口径 18.8 頸部径 16.1 体部径 26.4 底径 8.3	褐色 中位に黒褐の帯	橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラナデ ↓ ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	体部球形	〃
26	6－1	10－7	土師器	甕	口縁一部欠損		器高 32.1 口径 17.5 頸部径 14.9 体部径 20.4 底部径 6.5	暗褐色	暗褐色	やや軟質	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ ↓ ヘラナデ	ヘラナデ		不明	長胴甕・歪が顕著	〃
27	6－2	10－8	土師器	甕	部分的欠損有り		器高 32.1 口径 17.5 頸部径 14.9 体部径 20.4 底部径 6.5	黄灰色	黄灰色	良好 一部黒斑	ヨコナデ	ハケメ ↓ ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ ↓ ヘラミガキ	上位ハケメ 中・下位ヘラナデ	ヘラケズリ？	ヘラナデ	長胴甕	〃
28	6－3		土師器	甕	口縁一体部		口径 16.1 頸部径 14.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	やや軟質	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヘラナデ			長胴甕 頸部にわずかな段が有る	東北学院大学
29	6－4		土師器	甕	口縁一体部		口径 14.3 頸部径 11.6 体部径 17.3			軟質	不明	ヨコナデ	不明	不明	ヘラナデ			口縁外反の後直立 長胴長	〃
30	6－5		土師器	甕	完形		器高 12.9 口径 15.6 頸部径 14.4 体部径 15.0 底径 5.0	橙色	橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ ↓ ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ		東北大学

(1) 遺物図版目録－III

No.	図版 図	図版 写真	種別	器形(形態)	遺存(部位)	成形	法量	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	口縁部 内面	頸部 外面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	備考	保管
31	6－6	10－6	土師器	鉢	ほぼ完形	巻上げ？	器高 10.0 口径 12.5 底径 7.0	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラケズリ ↓ ヘラミガキ	ヘラナデ ↓ ヘラミガキ	ナデ ↓ ヘラケズリ	ヘラナデ		東北大学
32	6－7	11－4	土師器	甑	完形	巻上げ	器高 15.1 口径 20.6 孔径 2.7	褐色	褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラケズリ ↓ ナデ	ヘラナデ			口縁に粘土紐を巻く 円垂台形	〃
33	6－8	11－5	土師器	甑	口縁の一部欠損		器高 20.0 口径 22.4 頸部径 18.7 体部径 23.6 孔径 8.9	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	ハケメ ↓ ヨコナデ	ハケメ ↓ ヨコナデ	ハケメ ↓ ヨコナデ	ハケメ ↓ ナデ	ハケメ ↓ ヘラナデ	ハケメ			〃
34	7－1	10－9	土師器	台付甕	完形		器高 13.4 口径 10.7 頸部径 10.2 体部径 11.5 台上径 3.3 台底径 6.7 台高 3.4	褐色～暗褐色 底部黒褐色	上部黒褐色 下部褐色	2次酸化を受ける	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	ナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ ↓ ヨコナデ		〃
35	7－2	10－10	土師器	台付甕？	部分的欠損有り		器高 17.0 口径 13.9 頸部径 12.0 体部径 13.3 台上径 3.9 台底径 13.9 台高 7.8	にぶい橙色	にぶい橙色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	不明	不明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ	台部に火焔痕なし	〃
36	7－3		土師器	台付甕？	脚部欠損		口径 11.8 体部径 11.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや軟質								口縁短かく、外反	東北学院大学
37	7－4	11－7	土師器	壺	完形	巻上げ	器高 15.2 口径 12.0 口縁高 4.5 頸部径 7.3 体部径 14.6 底径 3.6	にぶい赤褐色	赤褐色	良好	ヨコナデ	不明	不明	下部 ↓ ヘラケズリ	不明	ヘラケズリ	不明		東北大学
38	7－5	11－6	土師器	壺	口縁の一部欠損	巻上げ	器高 16.1 口径 10.9 口縁高 5.5 頸部径 6.7 体部径 14.9 底径 6.4	にぶい黄褐色	黄褐色	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	不明	ナデ	不明		〃
39	7－6		土師器	壺	底部欠損		口径 11.4 口縁高 4.0 頸部径 7.4 体部径 14.8	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ		上位ナデ 下位 ヘラケズリ	ナデ				東北学院大学

(1) 遺物図版目録－Ⅳ

No.	図版 図	図版 写真	種別	器形（形態）	遺存（部位）	成形	法量	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	口縁部 内面	頸部 外面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	備考	保管
40	7－7	11－8	土師器	壺	口縁の一部欠損		器高 13.5 口径 11.1 口縁高 5.5 頸部径 6.3 体部径 12.4 底径 4.3	赤褐色	赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ ↓ ヘラミガキ		上位ナデ 下位ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ		口縁端部内湾	東北大学
41	7－8	11－9	土師器	壺	完形	巻上げ	器高 8.2 口径 8.2 口縁高 3.4 頸部径 5.7 体部径 8.4 底径 3.4	にぶい赤褐色	赤褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		ナデ	ナデ	ナデ		口縁部内湾	〃
42	7－9		土師器	壺	完形		器高 6.3 口径 7.8 口縁高 2.4 頸部径 5.3 体部径 7.5 底径 3.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ		ナデ	ヘラケズリ				東北学院大学
43	8－1	11－3	土師器	坏	ほぼ完形		品高 6.6 口径 9.7	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	平底（上げ底）	東北大学
44	8－2	11－1	土師器	坏	完形		器高 5.2 口径 9.2	赤褐色	赤褐色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	平底（上げ底） 内外面に丹塗	〃
45	8－3	11－2	土師器	坏	完形	巻上げ	器高 12.8 口径 17.7	灰褐色	灰褐色 （底部黒斑）	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ハケメ ↓ ヘラミガキ	ハケメ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	平底（上げ底）	〃
46	8－4		土師器	坏	完形	巻上げ	器高 7.5 口径 10.4	橙色	橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	平底（上げ底）	仙台市教育委員会
47	8－5		土師器	坏	完形		器高 8.1 口径 10.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ		丸底	東北学院大学
48	8－6		土師器	坏？	口縁～底部片		器高 10.3 口径 10.4	橙色	橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ ↓ ナデ		ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	丸底 （体部に炭化物付着）	仙台市教育委員会
49	8－7		土師器	坏	完形		器高 10.0 口径 9.4	橙色	橙色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ		ナデ	ヘラナデ ↓ ナデ	ヘラケズリ	ナデ	平底	〃
50	8－8		土師器	坏	完形		器高 5.2 口径 13.2	橙色	橙色	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラケズリ ↓ ナデ	ヘラミガキ （放射状）			平底	東北大学
51	8－9	12－5	土師器	坏	完形 （一部欠損）		器高 5.6 口径 13.8	にぶい橙色	橙色	良好	ヨコナデ	ハケメ ↓ ヨコナデ	↓	ハケメ ↓ ヘラケズリ	ハケメ ハケメ ナデ	ハケメ ↓ ヘラケズリ	ハケメ	平底	〃

(1) 遺物図版目録－V

No.	図版 図	図版 写真	種別	器形(形態)	遺存(部位)	成形	法量	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	口縁部 内面	頸部 外面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	備考	保管
52	8－10	12－6	土師器	坏	完形		器高 5.8 口径 23.0	口縁部赤褐色 底部灰褐色	赤褐色	良好 一部黒斑	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ↓ ナデ	ヘラミガキ	丸底(内面及び外面口縁部丹塗)	東北大学
53	8－11	12－6	土師器	坏	ほぼ完形		器高 6.3 口径 13.1	橙色	にぶい褐色	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ							〃
54	9－1	12－1	土師器	器台	一部欠損有り		器高 12.4 上部径 11.7 底部径 11.3	にぶい橙色	赤褐色	良好	ハケメ	ハケメ		ハケメ	不明	ハケメ	ハケメ		〃
55	9－2		土師器	器台	ほぼ完形		器高 8.0 口径 7.4 皿部底径 3.4 器台底径10.7	明黄褐色	明褐色	良好	不明	ヘラミガキ				ヘラミガキ	不明	3方透孔	東北学院大学
56	9－3		土師器	器台	接続部片		径 3.5			良好						ナデ	不明		〃
57	9－4		土師器	高坏	ほぼ完形	巻上げ	器高 15.2 口径 23.3 裾径 17.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ		ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	ヨコナデ	口縁端水平	仙台市教育委員会
58	9－5	12－2	土師器	高坏	完形	巻上げ	器高 16.1 口径 19.9 裾径 14.5	橙色	橙色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	不明		ヘラミガキ	ナデツケ	ヨコナデ	ヨコナデ		東北大学
59	9－6	12－3	土師器	高坏	½残存	巻上げ	器高 11.8 口径 18.1 裾径 13.0	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラケズリ ↓ ハケメ	ヘラミガキ	ヨコナデ		〃
60	9－7		土師器	高坏	坏部		口径 15.8 坏部高 4.5	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	下位ナデ	不明							東北学院大学
60	9－8		土師器	高坏	坏部		口径 16.7 坏部高 5.3	黄褐色	黄褐色	良好	ヘラミガキ	ヘラナデ ↓ ヘラミガキ							〃
62	9－9		土師器	高坏	坏部片						ヨコナデ	ヘラミガキ							〃
63	9－10		土師器	高坏	坏部		口径 23.9 坏部高 5.4	橙色	橙色	良好	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ	ヨコナデ ↓ ヘラミガキ							〃
64	9－11		土師器	高坏	脚部		脚部高 9.2 裾径 13.2							ヘラミガキ	ナデツケ	不明	ヨコナデ		〃
65	9－12		土師器	高坏	脚部片			橙色	橙色	良好				ヘラミガキ	ナデ				〃
66	第16図	12－8	須恵器	蓋	完形		器高 5.0 口径 12.0	灰色	灰色	良好 (環元焔)	ロクロナデ	ロクロナデ		天井部外面 回転ヘラケズリ	天井部外面 ナデ				東北大学

(2) 発掘調査出土遺物目録－Ⅰ

No.	種別	器形(形態)	遺存(部位)	成形	法量 縦×横×厚(cm)	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	口縁部 内面	頸部 外面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	備考	出土状況	図	写真	保管
1	土師器	甕	体部下半¼	ロクロ未使用	20× 14 ×0.7	にぶい褐色	黒褐色	良好 一部黒斑	—	—	—	ハケメ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ナデ↓ヘラミガキ	体部球形	拡張トレンチ2層上			仙台市教育委員会
2	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	4× 1.5×0.5	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—		〃 2層中			〃
3	土師器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	2.5× 4.5×0.8	橙色	橙色	良好	ヘラミガキ？	—	—	—	—	—	—		〃			〃
4	土師器	甕？		ロクロ未使用	1.5× 1.5×0.6	橙色	橙色	2次酸化	—	—	—	—	—	—	—		〃			〃
5	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	6× 4.5×0.5	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	—	—	—	ハケメ	不明	—	—	胎土に砂を多く含む	〃			〃
6	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	5× 5 ×0.7	橙色	橙色	良好	—	—	—	不明	不明	—	—		〃			〃
7	土師器	壺？	体部片	ロクロ未使用	2× 2 ×0.3	橙色	橙色	良好	—	—	—	ハケメ↓ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—		〃			〃
8	土師器	甕	口縁~体部片	ロクロ未使用	4× 2 ×0.4	橙色	橙色	良好	ヘラミガキ	不明	—	不明	不明	—	—	短かい外反する口縁	〃			〃
9	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	3× 3 ×0.6	黒褐色	にぶい褐色	良好	—	—	—	ハケメ	ヘラナデ	—	—		〃			〃
10	土師器	甕？	体部片	ロクロ未使用	3× 3 ×0.5	橙色	浅黄橙色	良好				ハケメ↓ヘラミガキ	ナデ				〃			〃
11	土師器	坏	口縁~体部片	ロクロ未使用	3× 2 ×0.5	黒褐色	黒	良好	ヨコナデ	ヘラミガキ		ヨコナデ	ヘラミガキ			内黒 口縁外反	〃			〃
12	土師器	坏	口縁部片	ロクロ未使用	3× 2.5×0.5	黒褐色	黒	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ						内黒 口縁直線的に外反	〃			〃
13	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	3× 3.5×0.7	黒褐色	にぶい褐色	良好				ハケメ	ヘラナデ				〃			〃
14	土師器	坏	体部~底部片	ロクロ未使用	3× 3 ×0.5	黒	黒	良好				不明		ヘラケズリ	ヘラミガキ	丸底	〃			〃
15	土師器	小片79点		ロクロ未使用													〃			〃
16	弥生式土器	壺？	口縁部片	ロクロ未使用	3.5× 3.6×0.3	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	良好	ヘラミガキ	ハケメ↓ヨコナデ	ハケメ					ゆるやかに外反	〃	14－5		〃
17	土師器	甕	口頸部¼	ロクロ未使用	4.5×12.5×0.5	浅黄橙色	浅黄橙色	やや軟質	ヨコナデ	不明	ヨコナデ					ゆるやかに外反	拡張トレンチ3層上面	14－4	20－4	〃
18	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	7× 5.5×0.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好				ナデ↓ヘラミガキ	ヘラナデ				〃			〃
19	土師器	甕	底部片	ロクロ未使用	4× 3 ×0.9	赤褐色	にぶい黄橙色	2次酸化						ハケメ／ヘラケズリ	ヘラナデ	平底	〃			〃
20	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	3.5× 3 ×0.4	暗褐色	暗褐色	良好				ヘラケズリ	ヘラケズリ				〃			〃
21	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	10×110 ×0.5	暗褐色	にぶい黄褐	良好				ヘラケズリ	ヘラナデ				〃			〃
22	土師器	小片5点		ロクロ未使用													〃			〃
23	土師器	高坏	脚部	ロクロ未使用	5× 7.5×1.0	褐色	褐色	良好	脚部外面 ヘラミガキ	脚部内面 ナデ						ラッパ状	小形溝－2 埋土	14－2	20－3	〃
24	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	6× 5.5×0.5	にぶい褐色	にぶい褐色	やや軟質				ヘラナデ	ヘラナデ			長胴	〃			〃
25	土師器	不明		ロクロ未使用	3× 3 ×0.5	浅黄橙色	黒	良好				ヘラミガキ	ヘラミガキ			内黒	〃			〃
26	土師器	高坏	坏底部中央	ロクロ未使用	2× 2.5×1.5	にぶい褐色	にぶい褐色	良好								脚部への挿入突起	〃			〃

(2) 南小泉遺跡発掘調査出土遺物目録－II

No.	種別	器形(形態)	遺存(部位)	成形	法量 縦×横×厚(cm)	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	口縁部 内面	頸部 外面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	備考	出土状況		図	写真	保管
27	弥生式土器	甕？	肩部片	ロクロ未使用	5× 7 ×0.6	にぶい褐色	にぶい褐色	良				ハケデ↓沈線	ナデ				小形溝－2埋土		14－6	20－5	仙台市教育委員会
28	土師器	小片5点		ロクロ未使用													〃				〃
29	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	2.5× 4.5×0.7	橙色色	橙色	やや軟質				不明	不明				小形溝－3埋土				〃
30	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	3× 3 ×0.5	暗褐色	暗褐色	良好				不明	不明				〃				〃
31	土師器	小片12点		ロクロ未使用と思われる													〃				〃
32	瓦	平瓦			6× 8 ×2.3	灰白色	灰白色	良(環元焔)	凹面 布目	凸面 縄目							溝状遺構		15－2	20－6	〃
33	瓦	丸瓦	玉縁部片		7× 6 ×1.7	にぶい橙色	にぶい橙色	やや軟質(酸化焔)	ケズリ	ナデ							〃			20－7	〃
34	瓦	丸瓦	玉縁部片		4.5× 6 ×1.4	橙色	橙色	やや軟質(酸化焔)	布目	ナデ							〃			20－8	〃
35	土師器	高坏	脚部片	ロクロ未使用	中央部径 3.8	橙色	橙色	2次酸化	外面 不明	内面 圧痕						支脚に転用された可能性有り(南小泉式)	〃	人	14－3	20－2	〃
36	土師器	坏	底部片	ロクロ未使用	6.5× 3.5×0.6	浅黄橙色	黒	良好						ヘラケズリ	ヘラミガキ	内黒	〃	為			〃
37	土師器	甕	頸部片	ロクロ未使用	3× 4.5×0.8	黒	黒	良好		ナデ	ヘラケズリ↓ヘラミガキ		ナデ			外反	〃	堆			〃
38	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	3.5× 2.5×0.7	黒	黒	良好				ハケメ	不明				〃	積			〃
39	土師器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	2.2× 3 ×0.5	浅黄橙色	灰白	良好	ヨコナデ	ヨコナデ						ゆるやかに外反	〃	土			〃
40	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	4.5× 4 ×0.5	にぶい黄褐	灰白	良好				ヘラケズリ↓ヘラミガキ	ナデ				〃	中			〃
41	土師器	高坏	脚部上端片	ロクロ未使用	2.5× 3				外面 ヘラミガキ	内面 不明							〃				〃
42	土師器	小片48点															〃				〃
43	須恵器	坏？	体部片？	ロクロ使用	1.2× 1.3×0.3	褐灰色	褐灰色	良(環元焔)									〃				〃
44	鉄製品	不明			幅 1.4 厚 0.25												〃		15－7	20－16	〃
45	土師器	壺	口縁部片	ロクロ未使用	2.7× 4.0×0.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	やや軟質	不明	不明						折返し口縁(塩釜式)	溝状遺構				〃
46	土師器	不明	不明	ロクロ未使用	2× 2.8×0.6	黒褐色	浅黄橙色(一部赤色)	やや軟質	外面 不明	内面 ヘラミガキ						内面丹塗	〃	自然堆積土中			〃
47	土師器	甕	肩部片	ロクロ未使用	3.3× 3.7×0.9	橙色～黒	暗褐色	やや軟質								胎土に砂を多く含む	〃				〃
48	土師器	小片9点		ロクロ使用のものはない													〃				〃
49	弥生式土器	甕	体部		底径8.2 体部径24.2 残存高24.0	橙～褐色	にぶい黄橙色	良好				LR 縄文		ヘラケズリ		底部に布の圧痕	〃		14－1	20－1	〃
50	瓦	平瓦			12×12.5×2	黒	黒	良(環元焔)	外面 ナデ	内面 ヘラケズリ						釘穴有り(近世以降)	第1層(耕作土)				〃
51	瓦	平瓦			10× 10 ×1.8	暗褐色	褐色	良(酸化焔)									〃				〃
52	土師器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	3× 5.5×0.6	にぶい褐色	明黄褐色	良好	ハケメ↓ヨコナデ	ヘラミガキ						外反 端部平担	〃				〃

(2) 南小泉遺跡発掘調査出土遺物目録－III

No.	種別	器形(形態)	遺存(部位)	成形	法量 縦×横×厚(cm)	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	口縁部 内面	頸部 外面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	備考	出土状況	図	写真	保管
53	弥生式土器	甕	体部片	ロクロ未使用	3× 4 ×0.6	褐色	灰黄褐色	良好				LR 縄文	ヘラナデ？				第1層（耕作土）			仙台市教育委員会
54	土師器	坏	口縁部片	ロクロ未使用	3× 3 ×0.6	黒	黒	良好	ヨコナデ	ヘラミガキ						外反の後内弯	〃			〃
55	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	3.5× 2.5×0.7	黒	黒	良好				ハケメ				直立の後外反	〃			〃
56	土師器	甕	頸部片	ロクロ未使用	4× 5 ×0.6	橙色	橙色	良好		ヘラミガキ（横位）	ヘラミガキ（縦位）	ヘラミガキ（斜位）	ヘラナデ			ゆるく外反	〃			〃
57	土師器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	2× 3.2×0.4	橙色	橙色	良好	ヘラミガキ	ハケメ							〃			〃
58	土師器	壺	口縁部片	ロクロ未使用	2.6× 3.2×0.3	橙色	橙色	良好	ヘラミガキ（縦位）	ヘラミガキ（縦位）						体部球形	〃			〃
59	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	10× 14 ×0.7	暗褐色	にぶい褐色	良好				ヘラケズリ↓ヘラミガキ	ヘラナデ				〃			〃
60	土師器	高坏	坏底~脚上部	ロクロ未使用	2× 6	橙色	橙色	良好									〃			〃
61	土師器	甕	底部片	ロクロ未使用	3.3× 6.5×1.5	橙色	橙色	良好						不明	不明	ゆるやかに外反	〃			〃
62	土師器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	4.2× 5 ×0.7	浅黄橙色	にぶい橙	やや軟質	不明	ヘラミガキ							〃			〃
63	土師器	甕	底部片	ロクロ未使用	3.5× 6 × 0.8	褐色	褐色	良好						ヘラケズリ	ヘラナデ	端部平坦	〃			〃
64	土師器	不明	口縁部？片	ロクロ未使用	4× 7 ×0.9	橙色	橙色	やや軟質	不明	不明							〃			〃
65	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	4.5× 5.5×0.6	橙色	暗褐色	良好				ハケメ	ヘラナデ			胎土に砂を多く含む	〃			〃
66	土師器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	2.2× 4.5×0.3	橙色	橙色	良好	ヘラミガキ（横位）	不明						胎土に砂を多く含む	〃			〃
67	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	5.5× 6.3×0.4	にぶい褐色	にぶい褐色	良好				不明	不明				〃			〃
68	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	5.5× 7 ×0.6	暗褐色	灰褐色	良好				ヘラミガキ	不明				〃			〃
69	土師器	高坏	脚部片	ロクロ未使用	上部径 2.9	橙色	橙色	良好								棒状の脚で空洞がない	〃			〃
70	土師器	甕	口縁部片	ロクロ未使用	4× 4 ×0.8	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	外面：ハケメ→ヘラケズリ	内面：不明						複合口縁の頸部	〃			〃
71	土師器	壺	頸部片	ロクロ未使用	5× 5 ×0.6	橙色	橙色	やや軟質									〃			〃
72	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	5× 7 ×0.9	黒	橙色	良好				ヘラケズリ	不明			木葉痕	〃			〃
73	土師器	甕	底部片	ロクロ未使用	3× 4.8×0.9	橙色	暗褐色	やや軟質						ヘラケズリ	不明		〃			〃
74	土師器	鉢	口縁~体部片	ロクロ未使用	3.3× 5.4×0.8	にぶい褐色	黒	良好	ヨコナデ	ヘラナデ		ハケメ	ヘラナデ				〃			〃
75	土師器	甕	底部片	ロクロ未使用	3× 3.5×1.1	黒	橙色	良好						ヘラケズリ	不明	坏底部か？内黒	〃			〃
76	土師器	不明	不明	ロクロ未使用	4.5× 4 ×0.8	橙	黒	良好	外面：ヘラケズリ↓ヘラミガキ	内面：ヘラミガキ							〃			〃
77	土師器	甕	体部片	ロクロ未使用	3.2× 1.8×0.6	黒	黒	良好				ハケメ	不明			南小泉式	〃			〃
78	土師器	高坏	脚部片	ロクロ未使用	厚さ 0.8	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	外面：ヘラミガキ	内面：ナデ						南小泉式	〃			〃

(2) 南小泉遺跡発掘調査出土遺物目録－Ⅳ

No.	種別	器形（形態）	遺存（部位）	成形	法量 縦×横×厚(cm)	色調 外面	色調 内面	焼成	器面調成 口縁部 外面	器面調成 口縁部 内面	器面調成 頸部 外面	器面調成 体部 外面	器面調成 体部 内面	器面調成 底部 外面	器面調成 底部 内面	備考	出土状況	図	写真	保管
79	土師器	高坏	口縁部片	ロクロ使用	口径 15.5 厚さ 0.4	灰黄褐色	灰黄褐色	やや軟質	ヘラミガキ（縦位）	不明		L				ゆるやかに外反して広がる	第1層（耕作土）			仙台市教育委員会
80	土師器	坏	口縁部片	ロクロ未使用	2.5× 5 ×0.5	橙色	黒	良好									〃			〃
81	土師器	甕	体部～頸部片	ロクロ未使用	5.2× 5.1×0.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好								頸部下端に	〃			〃
82	土師質土器	甕？	底部片	ロクロ使用	4× 6 ×1	浅黄橙色	浅黄橙色	良好（酸化焔）						ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切底	〃			〃
83	弥生式土器	甕	体部片		3.5× 6 ×0.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好				LR 縄文	不明				〃			〃
84	須恵器	壺	口頸部片		3.7× 3.3×0.5	灰色	灰白色	良好（環元焔）	ロクロナデ	不明	ロクロナデ					2条の隆帯細い波状文	〃	14－7	20－9	〃
85	須恵器	甕	体部片		1.8× 2.7×0.8	暗灰色	褐灰色	良好（環元焔）				格子叩目	不明				〃			〃
86	須恵器	甕	体部片		4.5× 4 ×1	褐灰	黒	良好（環元焔）				斜格子叩目	ハナデ				〃			〃
87	須恵器	甕	体部片		2.3× 4.5×0.4	褐灰	褐灰	良好（環元焔）				平行叩目	青海波文				〃	14－8	20－10	〃
88	須恵器	甕	体部片		5× 9.8×0.9	褐灰	褐灰	良好（環元焔）				平行叩目	不明				〃	15－1	20－11	〃
89	須恵器	甕	頸部片	ロクロ使用	3.4× 3.8×0.7	灰黄褐色	灰黄褐色	良好（環元焔）			ロクロナデ					両面に薄い自然紬	〃			〃
90	須恵器	甕	体部片		3× 3.5×1.1	黒	褐色	良好（環元焔）				ナデ					〃			〃
91	瓦	平瓦			3.8× 2.2×1.5	暗灰色		良好（環元焔）	外面 ナデ							光沢有り（近世以降）	〃			〃
92	陶器	甕	体部片	ロクロ使用	7× 8.2×0.8	灰褐色	灰オリーブ色	良好（環元焔）				ロクロナデ	ロクロナデ			外面に褐色釉 内面に緑色釉	〃			〃
93	陶器	甕	体部片	ロクロ使用	2.4× 4.5×0.6	黒褐色	黒褐色（胎土橙色）	やや軟質（酸化焔）				ナデ	ロクロナデ				〃			〃
94	陶器	不明	底部片	ロクロ使用	2.5× 2.7×0.6	にぶい橙色	にぶい橙色	良好（酸化焔）							ロクロナデ	回転糸切	〃			〃
95	陶器	浅鉢	体部片		4× 3.5×0.5	灰白色	灰白色（胎土灰褐）	良好（環元焔）								両面白色透明釉	〃			〃
96	陶器	大皿？	体部片	ロクロ使用	7× 7 ×0.8	浅黄色	浅黄色（胎土淡黄色）	良好（環元焔）				ロクロナデ	ロクロナデ			白色釉	〃			〃
97	陶器	小片6点															〃			〃
98	陶器	皿	底～体部片	ロクロ使用	4× 2 ×0.4	明緑灰色	明緑灰色（胎土白色）	良好				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	青色の草花文透明釉	〃			〃
99	陶器	椀	体部片	ロクロ使用	1.5× 4 ×0.4	明緑灰色	明緑灰色（胎土白色）	良好				ロクロナデ	ロクロナデ			青色の松葉文	〃			〃
100	鉄製品	不明	破片11点														〃			〃
101	フレーク			流紋岩	5.5× 3.5×2	褐色											〃	15－3	20－12	〃
102	石製模造品	剣形	端部欠損	滑石	長さ（残存）3.9 幅 2.0 厚さ 0.5	暗緑灰色										両面から穿孔		15－4	20－14	
103	石製品	不明		粘板岩	長さ（残存）3.9 幅 4.8 厚さ 0.4	黒										両面擦痕顕著		15－6	20－13	
104	石製模造品	剣形	両端部欠損	滑石	長さ（残存）3.1 幅 2.0 厚さ 0.5	暗緑灰色										紐すれが著しい		15－5	20－15	
105	土師器	小片624点																		

（3） 分布調査表採遺物目録－Ⅰ

番号	種別	器形	部位	大きさ	色調 外面	色調 内面	焼成	成形	調整 外面	調整 内面	その他	図版等の番号
1－1	須恵器	壺	肩部	2.9×3.0×0.8	灰	灰	良好	ロクロ使用	ナデ、ハケ目	ハケ目		
1－2	〃	坏	体部	2.6×1.9×0.4	灰白	灰白	〃	〃	ハケ目	〃		
1－3	土師器										小片2点	
2－1	須恵器	壺	体部	2.1×1.6×0.5	黒	灰白	良好	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目	外面黒釉	
2－2	土師器										小片11点	
3－1	土師器	壺	口縁部	4.3×3.6×0.9	浅黄橙	にぶい黄橙	軟質	ロクロ未使用	ケズリ	ナデ		
3－2	〃										小片2点	
4－1	須恵器	壺	底部	5.8×3.5×0.7	黒褐	灰白	良好	ロクロ使用	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	高付付　台	
4－2	〃	甕	体部	3.5×4.2×0.8	暗灰	灰	〃	ロクロ未使用	ケズリ	タタキ	内面タタキは青海波文	
4－3	〃	〃	〃	3.5×2.5×0.7	灰	灰褐	〃	〃	〃	ケズリ		
4－4	〃	〃	〃	3.6×2.4×0.9	灰白	灰白	〃	ロクロ使用	タタキ	ハケ目		
4－5	〃	坏	口縁部	3.6×5.7×0.3	灰	灰	〃	〃	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目		
4－6	土師器	壺	体部	3.3×3.0×0.4	にぶい赤橙	淡黄	やや軟質	ロクロ未使用	櫛目	—		
4－7	〃	〃	底部	5.9×3.0×0.8	浅黄橙	橙	軟質	—	ケズリ	—	磨耗している	
4－8	〃	甕	体部	5.9×3.0×0.8	橙	橙	良好	ロクロ未使用	—	—	磨耗している	
4－9	〃										小片20点	
4－10	石製品			径2.6							滑石製の有孔円盤、ほぼ完全である	第9図
5－1	須恵器	壺	肩部	3.5×4.7×0.7	灰	灰	良好	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目	外面に細いヘラキズ有り	
5－2	土師器	〃	体部	3.4×2.6×0.5	浅黄橙	浅黄橙	軟質	—	—	—		
5－3	〃										小片2点	
6－1	土師器										小片6点	
7－1	須恵器	甕	体部	8.0×3.9×1.1	暗灰	灰白	良好	ロクロ未使用	タタキ	タタキ	内面タタキは青海波文	
7－2	〃	〃	〃	4.0×4.0×0.7	灰	灰	〃	〃	ハケ目	ハケ目		
7－3	〃	〃	〃	4.1×3.2×0.8	黄灰	灰白	〃	〃	タタキ	ケズリ		
7－4	〃	〃	〃	3.2×1.5×0.7	暗赤灰	褐灰	〃	〃	〃	〃		
7－5	〃	〃	〃	3.5×2.4×0.4	灰	暗灰	〃	〃	〃	スリケシ	内面は青海波文のスリケシ	
7－6	土師器	壺	〃	3.7×2.9×0.7	灰黄褐	灰褐	やや軟質	〃	ケズリ	—		
7－7	〃	〃	口縁部	3.0×3.9×0.7	橙	淡赤橙	〃	〃	—	—	磨耗して調整不明	
7－8	〃										小片35点	
7－9	石製品			2.7×2.8							石匙、頁岩	第8図
7－10	古銭			径2.4							寛永通宝	
8－1	須恵器	瓶	円盤部	7.3×5.7×0.8	灰	灰	良好	ロクロ未使用	圧痕	ケズリ	樽形瓶片、体部外面に黒釉	第17図
8－2	〃	甕	体部	3.2×3.4×1.1	黄灰	灰赤	〃	〃	ケズリ	〃		
8－3	〃	〃	〃	4.0×2.0×1.0	灰	暗灰	〃	〃	ハケ目	ハケ目		
8－4	〃	壺	〃	3.4×3.7×0.5	暗灰	〃	〃	〃	ケズリ	〃		
8－5	〃	〃	底部	4.7×3.5×0.8	灰白	灰	不純物付着	ロクロ使用	〃	ナデ		
8－6	〃										小片2点	
8－7	土師器	壺	口縁部	6.3×4.0×0.6	淡黄	淡黄	軟質	ロクロ使用	ナデ	ナデ		
8－8	〃	〃	底部	4.9×4.0×1.0	橙	灰白	〃	ロクロ未使用	ケズリ	—	砂粒混入	
8－9	〃	〃	体部	3.6×3.1×0.8	〃	橙	〃	—	—	—	磨耗がはげしい	
8－10	〃	〃	〃	3.2×2.5×0.6	浅黄橙	浅黄橙	良好	ロクロ未使用	ケズリ	—		
8－11	〃										小片60点	
10－1	須恵器	甕	体部	3.0×2.5×0.6	黒褐	灰	良好	ロクロ使用	タタキ	ナデ	外画に釉が見られる	
10－2	〃	坏	口縁部	2.1×2.0×0.4	黄灰	黄灰	やや軟質	〃	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目		
10－3	土師器	壺	底部	3.5×2.7×1.0	橙	褐灰	軟質	—	—	—		
10－4	〃	〃	体部	3.0×3.2×0.5	にぶい橙	にぶい橙	良好	ロクロ未使用	ミガキ	ケズリ		
10－5	〃										小片16点	
11－1	〃	甕	底部	7.2×7.5×1.3	淡赤橙	灰白	軟質	ロクロ未使用	—	—	石英粒混入、もろい	
12－1	〃										小片6点	
13－1	〃										小片13点	
14－1	須恵器	坏	底部	2.5×2.8×0.7	灰	灰	良好	ロクロ使用	ケズリ	ハケ目		

（3） 分布調査表採遺物目録－II

番号	種別	器形	部位	大きさ	色調 外面	色調 内面	焼成	成形	調整 外面	調整 内面	その他	図版等の番号
14－2	土師器			3.0×2.3×0.9							小片6点	
1－1	須恵器	甕	体部	3.0×2.3×0.9	灰	灰	良好		タタキ	ケズリ		
15－2	〃	〃	肩部	5.5×3.9×0.7	〃	〃	〃	ロクロ使用	タタキ、ハケ目	ハケ目		
15－3	〃	壺	体部	2.5×2.6×0.5	〃	〃	〃	〃	ハケ目	〃	カーボン若干付着	
15－4	〃	甕	口縁部	3.0×1.4×0.6	〃	灰白	〃	〃	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	外面に釉	
15－5	〃	壺	体部	2.2×1.6×0.5	暗灰	灰	〃	〃	ハケ目	ハケ目		
15－6	〃	甕	〃	3.0×2.7×0.4	灰白	〃	〃	ロクロ未使用	タタキ	ケズリ		
15－7	〃	壺	頚部	1.8×2.0×0.2	黒	〃	〃	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目	外面に黒釉	
15－8	〃	坏	口縁部	1.8×2.0×0.2	灰	〃	〃	〃	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目		
15－9	〃	〃	〃	1.8×1.8×0.3	灰白	灰白	〃	〃	〃	〃		
15－10	〃										小片2点	
15－11	土師器	壺	体部	4.6×3.4×0.7	にぶい黄橙	橙	良好	ロクロ使用	ケズリ	ナデ	外面にカーボン付着	
15－12	〃	〃	〃	2.9×3.1×0.7	にぶい褐	〃	軟質	—	—	—	砂粒混入、磨耗している	
15－13	〃	坏	底部	3.4×3.0×0.4	淡橙色	にぶい橙	〃	—	—	—	磨耗がひどい	
15－14	〃										小片12点	
16－1	須恵器	甕	口縁部	6.0×6.2×1.0	灰	灰白	良好	ロクロ未使用	ハケ目	—		
16－2	〃	〃	体部	5.0×3.5×1.0	暗灰	灰	〃	〃	タタキ	—		
16－3	〃	〃	〃	5.3×3.7×0.7	灰	〃	〃	〃	〃	ナデ		
16－4	〃	〃	〃	4.1×3.2×0.7	〃	灰白	〃	〃	—	—		
16－5	〃	〃	〃	3.5×2.5×0.6	〃	灰	〃	〃	ナデ	—		
16－6	〃	壺	〃	4.1×3.5×0.5	〃	〃	〃	〃	〃	ハケ目		
16－7	〃	坏	〃	2.7×1.6×0.4	〃	〃	〃	ロクロ使用	ハケ目	〃		
16－8	〃	〃	〃	3.0×3.8×0.4	浅黄橙	明褐灰	やや軟質	〃	〃	〃		
16－9	土師器										小片31点	
17－1	須恵器	壺	底部	3.9×3.5×0.8	褐灰	灰白	良好	ロクロ未使用	ナデ	ナデ	台付	
17－2	〃	坏	体部	2.2×1.2×0.4	明褐灰	にぶい橙	〃	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目		
17－3	土師器	甕	〃	2.7×2.7×0.5	にぶい橙	〃	〃	ロクロ未使用	ケズリ	ナデ		
17－4	〃										小片12点	
18－1	〃										小片5点	
19－1	須恵器										小片2点	
19－2	土師器	壺	口縁部	2.6×3.6×0.6	にぶい赤橙	灰赤	軟質	ロクロ未使用	—	—	磨耗がはげしい	
19－3	〃										小片17点	
20－1	須恵器	壺	体部	3.1×3.3×0.6	灰	灰	良好	ロクロ未使用	ナデ	ハケ目	砂粒若干混入	
20－2	〃	〃	〃	3.4×2.3×0.5	灰白	灰白	〃	〃	タタキ	〃		
20－3	〃	甕	〃	2.4×2.5×0.7	灰	灰	〃	〃	〃	ナデ		
20－4	土師器										小片7点	
21－1	〃										小片6点	
22－1	須恵器	甕	体部	3.9×3.5×0.8	褐灰	灰白	良好	ロクロ未使用	ケズリ	ナデ		
22－2	〃				淡赤橙						小片1点	
22－3	土師器	坏	口縁部	3.2×2.2×0.4	淡赤橙	橙	良好	ロクロ使用	—	—		
22－4	〃	甕	〃	1.8×2.8×0.5	淡橙	淡橙	〃	〃	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目		
22－5	土師器										小片3点	
23－1	須恵器	坏	体部	3.6×1.9×0.4	灰白色	灰白	良好	ロクロ使用	ハケ目	ハケ目		
23－2	〃	壺	〃	2.7×2.5×0.6	〃	〃	〃	ロクロ未使用	タタキ	—		
24－1	〃										小片1点	
24－2	土師器										小片1点	
24－3	〃	壺	底部	2.8×2.6×1.4	淡赤橙	淡赤橙	良好	—	—	—	磨耗がはげしい	
25－1	土師器	〃	体部	3.1×2.9×0.7	にぶい黄褐	黒	〃	ロクロ未使用	—	—	内黒	

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）

仙台市文化財調査報告書第13集
昭和52年度
南小泉遺跡範囲確認調査報告書
昭和53年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL (25)6466(代)

文化財愛護シンボルマーク